

---

# マフィア～強さと足跡～

夜嵐水龍

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

マフィア～強さと足跡～

### 【Zコード】

Z7206C

### 【作者名】

夜嵐水龍

### 【あらすじ】

主人公ザギイとヒロインルミナーレが繰り広げる戦い。それでも意味はある。読んでいただけたら幸いです。悪いマフィアではございません。

## プロローグ

少年達は過去を捨てなければならぬ。  
でも思い出してしまう。

何故つて、彼らだつて人間だからだ。

マフィア あじあと 強さと足跡

室内

「ザギイ様。ボスからお手紙です。」

黒いサングラスをかけた男が、灰色の髪の少年に話し掛けた。

「ああ。」

ザギイと呼ばれた少年は手紙を受け取り、自分のソファーに座つた。そしてその手紙を開けて、読んだ。

「ふーん。こりや、楽しくなりそうだ。」

少年は口をゆがませ、微笑んだ。

この世界、グローボワールドは、我々の世界とあまり変わりはなかつた。

変わつてゐるのは、歴史のみ。

と言つてもそんな大げさには変わつていない。

ここはイタリーノ。そして彼は、マフィアだつた。

彼の名は、ザギイ・フェンデレ。テネブラファミリーの一人だつた。テネブラファミリーとは、マフィア界で最強と謳われているマフィ

ア組織で、ザギイはその幹部である。

そして彼は剣術を得意とし、ついたもつ一つの名前は『鬼神のザギイ』。

そんな彼は今、ファミリーのボスから指令を受けた。  
内容は“トウロンバファミリーのボスの娘を探し、送り届けろ”といつもの。

トウロンバファミリーとは、テネブラファミリーと同盟を組んでいるマフィア組織であり、力はあまり大きくない。  
そしてこの頃、トウロンバファミリーは何者かに狙われていた。  
敵は誰だか分からぬ。つまり敵の情報はゼロ。  
ザギイは、命の危機にあたるのが好きだ。  
そのスリルを感じるのが大好きなのだ。  
だから今ザギイは、内心うきうきしていた。

## プロローグ（後書き）

読んでいただき、ありがとうございます！  
次回、ヒロインルミナーレ登場！！

## 任務開始

「それじゃあ、まずは娘だな。」

そう言つてザギイは動き始めた。

バタン

「私も一緒に行く。」

家から出た瞬間、誰かに声を掛けられた。

ザギイは振り向いた。

「こっちこっち。」

声の主は、ザギイと同い年くらいの少女だった。

ザギイは“やつぱり”といった顔で、少女に問い合わせた。

「何のようだ？」

ザギイは、冷たく言い放つた。

「そういう怖い顔しないでくれる？相棒なんだしさ。それにザギイは、戦いは上手だけど、情報収集は下手なんだから、私がいたほうがいいでしょ。」

少女は一切動搖せずに言つた。

「うるせえ。第一、お前は俺の相棒じゃねえし、それに情報なん

かいらねえ。」

「はあ…。情報はマフィアにとつて大切なんだよ？」「

「けつ知るか。」

彼女の名前はルミナーレ・ビジゴ。

フリーの殺し屋、兼、情報屋である。

忍術を得意とし、その身軽さを利用して情報を集める忍者である。

その体のしなやかさと髪の黒さから、ついた名前は『黒猫のルミナーレ』。

「ルミナーレ、おまえまた俺から金を取る気か？」

「もちろん！今日は10万ユーロね！」

ルミナーレは笑顔で且つ、目映い光を放つて答えた。

ルミナーレは金好きだ。

「はあ

「は…」

ザギイはため息をついた。

「今日は安い方でしょ？」

「知るか。」

ザギイは冷たく言つたが、最終的には連れて行く。  
というより、ルミナーレが付いてくると言つた方が正しい。  
そんなこんなでザギイとルミナーレの任務が始まった。

「ねえザギイ…。」

歩き始めて早10分。

ルミナーレが口を開いた。

「ああ？」

「娘を捜すつたつて…どうせひつて？」

「知るか。」

「ふうん…そつか。」

ルミナーレはそれが当たり前のように答えた。

「私が捜そつか？ザギイがこの任務にそんな楽しそうな顔してるのは、戦えるからでしょ？久々の任務だしね。」

「……」

「じゃあ私が探すね。」

ザギイが黙つているのでルミナーレは、ザギイの気持ちを察し、  
言った。

「つて、その前に、ザギイ。手紙と一緒に写真入つてたでしょ。」

貸して。」

ザギイはポケットから写真を取り出し、ルミナーレに渡した。

「あらま。可愛い子だこと。」

「お前と違つてな。」

「うつうるさー……」

（でもそんなこと言つなんて、よつほど楽しいんだううな。…あれ？この娘…）

ザギイとルミナーレは長い付き合いだ。

ザギイはテネブラの一人だが、ルミナーレはフリー。依頼さえあれば敵にも味方にもなる。でもほとんどが味方だった。

敵としても戦いと言つより競争。どちらが先に獲物を捕るか、それだけだ。

もうほとんど幼馴染み状態だ。だから一人ともお互いの気持ちはほとんど分かる。

ザギイはルミナーレを構わない。いつも冷たく返すだけ。でも楽しいときはザギイの方からルミナーレを構う。だから今、ザギイは楽しいのだ。

「それじゃ探すね。」

そういうてルミナーレは写真を宙に投げた。

【ヴォント・ブスカ 捜し風】

ルミナーレがそういうと写真が何かに引かれるよつに動き始めた。

ルミナーレはそういうて空に手をついた。

するとどこからともなく純白の大きな鳥が飛んできた。

これは一般的に言つて“口寄せの術”と言つて、ルミナーレの場合は、この大きな鳥、『カントディテツツア』を呼ぶ。

「ザギイ、見つけたよ。あっちだつて。早く乗つて。」

「ああ。」

一人を乗せたカンディテツツアは空高く飛び上がつた。

そして写真の行く方に飛んだ。

## 任務開始（後書き）

ルミナーレ登場！

次回は、ルミナーレの術公開（？）  
次回もどうぞ、お読みください。

「人がたどり着いたのは廃墟となつた町だつた。

「ここだね。でもこれ以上は分からぬ。この町いろいろと入り組んでるみたいだか……！」

ルミナーレは言いかけて何かに気付いた。

「いるのか？」

「うん。」

バンツ…バンツ…

かすかに銃声音が聞こえる。

この時代、銃を持つてるのは、裏社会の人間か警察だけ。でもここは廃墟だから今いるのは裏社会の人間。

スツ

「待つて」

ザギイが戦いたくて立とうしたとき、それをルミナーレが止めた。

「なんだ？」

「私がいく。」

「は？」

「ザギイは戦いたいだけでしょ？情報は私が集めるから私が呼んだらでてきて。」

「ちつ…

「じゃ」

ルミナーレは短く言い残して行つた。

ルミナーレはまず、敵の情報をつかむため、物陰に隠れて様子を見た。

「いつまで隠れてるつもりだ！出てきやがれ！！！」

バンツバンツ

そこには銃を持った男が一人いた。

（見たこと無い顔。下つ端か。ま、一人のお嬢様捕まえるには十

分か。）

【変化】

ルミナーレは正体がばれないように他の女に変化した。

「ねえ、貴方達のボスに頼まれてきたんだけ。どう?捕まえられた。」

ルミナーレが装つたのは依頼を頼まれた女の殺し屋。

女の方が弱くみえて相手も油断しやすい。

「ああ?お前もあの女を捕まえにきたのか?それは残念だ。あいつは俺らが捕まえる。」

「どうより、お前本当にティーグレファミリーに雇われてんのか?」

「え?」

ルミナーレは何故バレたのか不思議だつた。

「ティック様は依頼なんてしねえし、それに女はな…。したとしても連絡が絶対来るからな。」

「ふーん。そういうことね。」

ドンツ

そう言つとルミナーレは変化をとき、姿を見せた。

「ザギイーもういいよー雑魚だけど殺らないよりマシでしょ!」

「やつとか。」

そう言つてザギイは建物の上から飛び降りた。

「な!?『黒猫のルミナーレ』と『鬼神のザギイ』だと…?」

相手は一人の正体を知り、驚いた。

「じゃ、あとはよろしくね、ザギイ。」

ドカツ ドゴツ バキツ

「フン。刀を抜かせねえとは……まあ雑魚だからな。」

「よつわー。殴られただけで殺られるとは……」

そう、相手は雑魚の雑魚。

殴られただけで殺られてしまつとは……情けない。

「わあ、そこに隠れてないで出ておいで。私達は味方だよ。」

ルミナーレが優しく言つたが出てこない。

「……まさか。」

ルミナーレがハツとなるとザギイも分かつたらしく首を縦に振つ

た。

二人は壁の裏へ素早く回つた。

二人の思ったとおり、そこには誰もいなかつた。

「ちつ、逃げやがつたか。」

「探してみる。」

そう言つてルミナーレは耳をすまし始めた。

タツタツ……タツ……

「あつち!」

ルミナーレは南を指差した。

「行くぞ。」

「うん。」

バツ

## 発見（後書き）

駄文ですね。  
読んでいただき、ありがとうございます。

「まだか！？」

二人は娘を追つて廃墟となつた建物のザギィは間をルミナーレは上を走つていた。

「まだまだ。さすがにマフィアの娘だけあって結構速いよ。ザギィはこのまま走つて！私は先に行つて前から攻める。ザギィは後ろからお願ひ！」

「挟み撃ちだな！？」

「うん…じゃ、よろしく…！」

ピュン

ルミナーレは音を立てて建物の上を走つた。  
やはり忍者の足はとても速い。

（そんなに遠いのかよ。）

ザギィはそう思い速度を上げた。

ハアハアハア……

「どうしよう…戦わなきゃ…かな？」

「戦つてもあんたに勝ち目はないね。」

「だれ！？」

上から聞こえた声に驚き、銃口を向けた。

「あらあら、威勢の言いお嬢様だこと。でもそんなことしても私は敵わないわよ。」

「うるさい…！」

娘は今にも泣きそうな顔をしてルミナーレに反抗した。

「あなたにわかるもんか！この…パパや家族全員に裏切られた気持ちは…！」

「え…？」

「おい！」

そこへザギイが追いついた。

「俺達はお前の敵じゃねえ！ テネブラの者だ！」

娘がまだ疑つてるのでテネブラのバッヂを取り出すと娘は驚いた。

「「」ごめんなさい！ 貴方方がテネブラの方だとは知らなくて… 本当にごめんなさい！」

娘は謝罪した。

「いやいや、 いって。 私はルミナーレ。 ルミナーレ・ビジュ。

で、 こっちの仮頂面がザギイ・フェンティレ。 よろしくね。」

「あたしの名前はライヤナ・トゥロンバです。 こちらこそよろしくお願いします。」

娘はペコッとお辞儀した。

この娘はライヤナ・トゥロンバ。 その名の通り、 トゥロンバファミリーのボスの娘だ。

実際に見えてみると凄く幼く、 本人はまだ八歳だという。 ザギイは十八歳くらいで、 ルミナーレは十八歳だから一人から見ると十歳も年下になる。

金髪の髪の毛やピンクのワンピースには所々汚れたところなどがあり、 きっと今まで色々なヤツに追われていたのだろう。 まだ八歳というのに可哀相だ。

しかし、 それがこの裏社会とも言える。

「行くぞ。 時間を無駄にするな。」

「うん。」

ザギイに言われルミナーレは立ち上がった。

「行くつて…どこに？」

「そりや、トウロンバに決まつてゐるでしょ。」

「やだ！やだ！やだ！やだ！あたしパパのところ行きたくない！」

パパはあたしの事嫌いなんだから！！！」

行き先を聞いたライヤナは地団太を踏んだ。

「ちつ…これだからガキは。」

確かにライヤナとザギイ達は十歳くらい違つ。八歳のライヤナにこの状況は、把握できないのである。

「…だ」

ルミナーレが何かつぶやいた。

「ん？」

地団太を踏んでいたライヤナがルミナーレの言葉に反応した。

「嘘だ、そんなの。いいか、今トウロンバは何者かに狙われている。だからお前の父親は危険な目に合わせないために、お前を無理にでも外へ出したんだ。」

ルミナーレの顔つきが変わった。

「ウソよ。パパは本当にあたしの事……」

ライヤナは必死に否定する。

「あんた、反抗しなかつた？」

「なつ！何でそれを…！？」

事実を言われライヤナは驚いた。

「なら、それは本心じゃない。実の子供を嫌う親なんていない。」

ルミナーレはあるで自分のことを言つよつて言つた。

「…で…も…」

「なら、騙されたと思って俺達とこ。そこで、自分の田で確かめればいい。」

ザギイはまだ疑つライヤナに言つた。

トン

ザギイはルミナーレの肩を叩いた。

「過去を引きずるな。お前は殺し屋だ。カリネ・ムリネッロ。」ザギイはライヤナに聞こえないくらいの声で言った。

「……それは言わないはずじゃない？」

ルミナーレはザギイに殺氣を向けた。

「要するに、さつきのお前は過去を引きずつてたつてことだ。そんなことしてたら…死ぬぞ。」

「…………ごめん。」

ルミナーレはザギイに真実を言われ謝った。

「それじゃ、行くぞ。」

「うん。…つて待つて！」

早く戦いたいザギイをルミナーレが止めた。

「私とザギイだけなら長年コンビを組んでるからいいけど、今回はライヤナもいる。だから策を立てなきゃ。」

ルミナーレはニカツと笑った。

「いい?まずはライヤナを届けるのが先。」

「先?先つて何だ。俺達の任務はそこまでだぞ。」

ルミナーレの言葉にザギイが釘を差した。

「何言つてんの。ライヤナを届けても敵がそれで收まるはずない。だから、ライヤナを届けたら私とザギイは敵を倒していく。」

「……戦えるんだな。」

ザギイの言葉にルミナーレは頷き、話を再開した。

「敵はたぶんティーグレ。あそこは田を付けた獲物は決して逃がさない。だからライヤナを届けても油断は禁物。まあまずはライヤナね。」

ルミナーレはやつこつて立ち上がった。

「で、どうする?」

「は?何がだ?」

ルミナーレの変な質問にザギイは首を傾げる。

「ライヤナのこと。どっちが背負つ？」

それぐらに分かつて。トルミナーレは付け足した。

「そりや、お前だろ。ガキのお守りは性に合わん。」

分かつてんだろ。ヒザギイが言い返す。

「はいはい。じゃあライヤナ、私の背中に乗つて。それと敵と遭遇したら私は戦うために手を離すけどちゃんとくつついててね。」

ルミナーレはそう言うとライヤナを背負つた。

## 現実（後書き）

まだまだ続きます！  
ルミナーレの過去はもう少しあと、先……

ザギイは刀に手をかけ、ルミナーレはライヤナを背負いながら、森の中を走っていた。

「妙だな。敵が誰もいねえ。」

ザギイが眉間に皺を寄せながら囁く。

「……隠れる気配は無いけど……？」ライヤナ？

ルミナーレの背中に背負われているライヤナの手がガクガクと震えている。

「怖い？」

ルミナーレが聞くと、

「あたし……どうしよう……パパが……皆が居なく……なつたら。」

ライヤナは今にも泣き出しそうな震えた声で囁く。

「……大丈夫。私たちがトウロンバは守るよ。」

ルミナーレは「コツ」と笑つて励ました。

「……。」

ザギイはそれを痛いよつた目で見ていた。

「今田はここにまだいるよう。」

ルミナーレはそう言つてライヤナを背中から降ろした。

「え？ 行かないの？ まだお日様昇つてるよー？」

ライヤナが驚いたように聞く。

「うん。でもそろそろ沈むから。夜の森は危険だよ。それに今のうちに食料も取つておかない」

「やだ！ やだやだ！ 早く行け！ 早く行け！」

「」

ルミナーレが言い終わらないうちにライヤナがダダをこねた。

そしてそのライヤナをザギイが手刀で気絶させた。

「？ザギイ？」

「この方が良い。これ以上ライヤナが駄々をこねるとお前が昔を引きずる。」

「……」

「何も考えるな。無になれ。お前はマフィアだルミナーレ・ビジユ。」

「……」

ザギイの言葉にルミナーレは何も言わない。

ただ俯いているだけだった。

「ライヤナを見る。俺は食いもんを取つてくる。火も熾しとけよ。」

ザギイはルミナーレに命令すると食料探しに行つた。

「パ…パ…ママ…み…んな…」

ライヤナが涙を流しながら呼んだ。

「……無理だよザギイ。そんなこと…。だつてライヤナは…ライヤナのお父さんは…」

そこまで言つてライヤナの方に目線を向ける。

「……守つてあげるよ。あんたは…私みたいには…絶対にしないかう。」

そう言つてライヤナを持ち上げ、寝かせてから火を熾し始めた。

パチパチ

いつものようにザギイとルミナーレは焚き火を間に向かい合つてザギイがとつてきた魚を食べていた。

だけどいつもと違うのは一人の隣にライヤナが寝ていることと、一人の間に会話が無いこと。

「先に寝る。」

「……」

「クン

少し間があつてルミナーレは頷いた。

いつものように焚き火を消したら交代で見張りをする。

今回はザギイが先に見張りだ。

毎回先か後を交代でやっていて、この前ルミナーレだつたからだ。

「……。」

“おやすみ”的一言もなしにルミナーレは寝た。

（仕様ねえか。ライヤナはルミナーレの……たつた一人の従妹だもんな。それに……写真でしか知らないが、あいつにも……）

ザギイはそう思いながら見張りをした。

## 気遣い（後書き）

ザギイの優しい？一面。  
次回はいよいよ突入です！

## 突入

「うつ…眩しい…って朝！？」

ルミナーレが起きたのはなんと朝だった。  
つまり見張りを交代していないのだ。

「起きたか？」

焚き火の跡をして横にはザギイが居た。

「おこ…さなかつたの？」

「ああ。起こうと思ったがお前が泣いてたもんだから起こうわよ俺  
がやつた。」

「…！…な…泣いてたの、私？ってか見たの？」

ルミナーレが顔を赤くする。

「ああ、泣いてた。心配すんな。顔なんか見てねえよ。声が聞こえ  
ただけだ。」

ザギイがぶつきりぱうに言つ。

「ライヤナを起こせ。行くぞ。」

「うん。」

ルミナーレはライヤナの方へ行き

「ライヤナ、行くよ。起きて。」

「ううん…。ママ…」

「…！」

ライヤナが寝言を言いながらルミナーレの服の裾を掴んだ。  
それにルミナーレが反応する。

「うん…？あれ？ルミナーレお姉ちゃん？」

ライヤナが起きた。

しかしルミナーレは固まっている。

「ゴツッ

「痛ツ！」

固まっているルミナーレの頭をザギイが刀の柄で叩いた。

「行くぞ。」

「あ…うん。」

ルミナーレがライヤナに背中を向けるとライヤナはルミナーレに乗つかった。

「後どれくらいだ？」

走りながらザギイはルミナーレに聞く。

「後…少しだと思う。森が開けたら屋敷だよ。」

ルミナーレの声が濁っている。

しかしザギイはそれを気にしないでいた。

「待つて。」

「何だ？」

森が開けるまで後少しどうどうでルミナーレが止めた。

「……！？居る！一人、一人、……『じつ五百人以上！？』

「なつ何だと！？」

ルミナーレが精神を集中させ敵の数を読んだ。

「何で？まるで…ティーグレが…全員居るみたい…。」

ルミナーレは目を見開いた。

「これじゃあ…ライヤナを届けられない。策を他に考へるしか…

…分かった！」

「何か思いついたのか？」

ルミナーレが何かに気付いたように手を叩いた。

「ザギイ。ザギイは正面突破よ。敵がそれに釣られて居なくなるのを見計らって、私達は屋敷内に入る。」

「俺だけって…すぐバレるんじゃねえか？」

「大丈夫。分身を付けとくから。」

さっきの声はどこへいったのやら、ルミナーレの声は通っていた。

「分かった。だが、いいか、ルミナーレ。お前はルミナーレだ。ル

ミナーレ・ビジュ以外の何でもない。お前は殺し屋だ。分かつたな？』

「……大丈夫！私は私。ルミナーレだよ。ルミナーレ以外の何でもないよ！」

少し間を開けてからにこりと笑いルミナーレはガツツポーズをした。

「じゃ、」

「幸運を祈る。」

そう言って一手に分かれた。

「ルミナーレみたいに情報収集するのは面倒だな。……やっぱり強行突破に限るな。」

ザギイはニッと笑い、門を目掛けて走つていった。

「……敵を確認！あれば……『鬼神のザギイ』と『黒猫のルミナーレ』、それにトウロンバの娘です！！」

ザギイとルミナーレの分身を見つけた敵の一人がトランシーバーを使って誰かに情報を伝えた。

そして何かを聴くと警報を鳴らした。

『ファミリー全員へ告げる。『鬼神のザギイ』、『黒猫のルミナーレ』、トウロンバの娘と思われる三人組みが前門へ向かってきている。手が空いているものはすぐに前門へ集合し、奴らを捕らえろ。トウロンバの娘は傷つけるな。』

屋敷中に放送が流れる。

ザギイはだんだんと嬉しくなってきた。

久々に回りを気にせず暴れられるのだ。

いつもは自分の背中をルミナーレに預けて前だけの敵と戦っているから、ちょっと不満だったのだ。でも今回はザギイ一人。居たとし

てもルミナーレの分身。こんなダリー、すぐにバレてしまつ。つまり、ザギイは一人同然なのだ。

「ザギイ…上手くやつたみたいね。じゃあ行くよ、ライヤナ。」  
ライヤナは縦に首を振つて答えた。

ルミナーレはライヤナを背負いながら屋敷内へ入つた。

「ライヤナ、お父さんの居る所、分かる?」

「うーんと…もう一つ先の角を右に曲がつた一番奥の部屋。」

「分かつた。じゃ、これから先は一言も喋らないでね。見つかるから。」

ライヤナはまた首を縦に振り、答えた。

ドタバタドタバタ

「前門だ！前門へ急げ！！」

敵の急ぐ足跡と声が聞こえた。

ルミナーレは物陰に隠れ足音が止むまで待つた。

サツ

聞こえなくなるとルミナーレは立ち上がり先を急いだ。

## 突入（後書き）

ついに突入です！

次回は、ルミナーレの戦い前半です。

「ハツ…ビツしたんだよ…? ティーグレもそんなんに成りまつたのか…?」

「うつうつぱり…強え…」

「弱え…弱え…もつと強え奴はいねえのか…?」

ザギイの回りはすでに死体の山だった。

「じゃあ、僕が相手してあげる。テネブラの幹部さんが来たんじやあ、ティーグレの幹部さんが出てあげないとねえ。こんな弱いやつらと戦つより、僕みたいに、強いヤツのほうがあ、楽しいでしょお?」

そう言つて出てきたのは身長150センチくらいしかない子供だった。

「?お前が…幹部?」

さすがにザギイでもこれは驚く。

「あのねえ、僕のことも、あんまり子供つて思わないほうが多いよ。僕はあ、ちょっとお、ちつちつやいだけだよ。中身はあ、あの頃の君と同じだよ。ザギイ。」

「…テメエ…なんでそれを知つてやがる。」

「あのねえ、僕達のボスはあ、調べることが大好きでねえ、君たちのこともあ、調べちゃつたんだよ。」

「…ルミナーレ…」

「そうそう。彼女のこともあ、全部ねえ。」

その子供は黒く不敵な笑みだった。

ザツ  
サツ

(速い!?)

ザギイが動いた瞬間、子供とは思えないスピードで子供が前に立ちはだかつた。

「ダメだよ。彼女のところへは行かせないよ。行くなら僕を倒してから行つてねえ。」

「うつ…」

さすがにザギイでもこの子供のスピードには勝てない。

「そうだ。僕の名前え、教えてなかつたよねえ。僕の名前はあ、フォートつてゆうんだ。あんたを壊す男お。よろしくう。」

フォートは笑つてゐるが、後ろにはどす黒いオーラが放たれている。

「ま。いいか。遊んでやるよ。」

ザギイの眼はさつきの冷たい目から楽しい目、簡単に言えば鬼の目に変わつていた。

「ふふふう。」

「いいでいいの？」

ルミナーेはライヤナの言われた通りに進んだ。  
そして目の前には大きなドアがあつた。

ライヤナが頷くとドアを押した。

ギィイイイ…

鈍い音を立て、扉が開いた。

力チャツ

銃の音にルミナーेは反射的にクナイを構えた。

「パパ…！」

ライヤナが叫び、ルミナーेの背中から下りた。

そして椅子に腰掛けてゐる男の人のほうへ走つていつた。

「…ライヤナ！？」

男の人はライヤナを抱きしめた。

ルミナーेを囮んでいた銃は降ろされ、周りの人は後ろへ下がつた。

「そうかそうか。私はトゥロンバファミリーのボス、ハッド・トゥロンバだ。君がライヤナを運んできてくれたのか。ありがとう。だがライヤナをここへ置いておくわけには行かない。ライヤナを連れ

出してどこか安全な場所へ行ってくれ。」

ライヤナの話を聴いたハッシュは、ルミナーレにライヤナを頼んだ。  
しかしルミナーレは

「いいえ。その依頼は受けません。ハッシュさんはここに留めて戴いて結構です。外に居るティーグレは私とザギイで倒します。貴方はここで、ライヤナと一緒に居てあげてください。このトウロンバは、私たちが命に代えてもお守りします。」

深く会釈するとドアノブに手をかけた。

「…？君。どこかで見たことがある。名前はなんと言つ。」

ちゃんと思い出せないハッシュはルミナーレに問い掛けた。

「名前など、貴方様に言つようなものではございません。それでは。

」  
ルミナーレはこれ以上顔を見られないように背を向けた状態で答え、そのまま外へ出て行つた。

（念のために…）

そう思いルミナーレは札を貼つた。

【封印】

スイジックラトウーラ

（これでこの札をはがさない限り出でこられない。すぐに倒すから。それまで…）  
ルミナーレはドアに背を向け走り出した。

ザツ

廊下を少し行つたところで敵と遭遇した。

「何…？ここにもだと…？外はダミーか！」

「遇つちやつたか。まあいいや。暇してたんだ。」

ルミナーレはそう言つとヒラコと敵を軽く飛び越し

【氷の刃】

忍術で敵を切り刻んだ。

「うおおお…お…」

男は声をあげ息絶えた。

「何事だ！！」

その声を聞きつけたのか他の奴らが集まる。その数、ざつと五十人といったところだ。

「多つ。ま、いいか。」

【氷の龍】

ギアツ チオ・ドウラーヴ

ルミナーレが術を出すと四方八方に氷の龍が飛んだ。

「樂勝樂勝」

「あらあら。やられたの？ホント、お馬鹿さん達ね。」

「誰だ！？」

何処からか女の声が聞こえてきた。

「うふふ。気がお強いのね、黒猫さん。」

ルミナーレの前に現れたのは着物を着た黒髪の女。歳は軽く二十歳を越えているだろう。

「……お前は『骸骨の沙梨華』。そうか。ティーグレの一人だったね。」

「あら。知つていてくれたの？さすが情報屋さん。嬉しいわ。」

沙梨華がルミナーレに笑顔を向けた。

そこら辺の男なら簡単に引っかかるくらい美人だ。

「さてと。もう少しお話していただき、私も仕事だし、それに貴女、骸骨が似合いそうもないわ。だから私から死体をプレゼントしてあげる。」

【骸骨の逆襲】

ジハシ・コントラーレ

沙梨華が扇子をルミナーレに向けると周りに転がっていた、屍ガルミナーレを取り囲み、攻撃してきた。

「うう……」

【炎の鼠】

ファイア・イングイネ

ルミナーレの周りから炎の塊が鼠のように屍の身体を這つた。

「ふーん。考えたわね。そうよ。屍は燃えやすいの。というより、人間が、ね。でも勘違いしてない？私は『骸骨の沙梨華』。骸骨のほうが専門なの。」

沙梨華が笑う。

(どうしよう…骸骨に…何が効くの?)

ルミナーレの頭のなかは混乱していた。

「そうそう。貴女も可哀相だけど、貴女のパートナー、鬼神さんのほうが可哀相よね。だって…彼、あの子に気に入られちゃったみたいだから。」

沙梨華はクスクスと笑う。

「あの子…?」

「ええ。ティーグレファミリー幹部の歴史上、最強で天才と呼ばれている男の子。年齢14歳にしてティーグレの幹部、任務は全て無傷。返り血も汚れ一つ付けて帰つてこない。天才少年、フォート。敵には絶対回したくないわね。と笑いながらも、怯えた表情で説明する沙梨華。

「フォートつて…『与しのフォート』…あの…一度見た技はすべてコピーするつて言つあの…!」

ルミナーレは驚きを隠せない。

殺した物は星の数以上と言われている天才少年。一度見た技、それが剣術であろうが、忍術であろうが、その人の特殊の能力であろうが、全てをコピーする。

「おやおや。人の心配をする余裕が何処にあるの?他人の心配より自分の心配をなさい。」

(そうだった。ザギイを助けに行くにしてもまずこの女を何とかしないと。)

そうは思つてもいい方法が浮かばない。

ザンツ

「大丈夫か!…ルミナーレ!…」

「ザ…ギイ?」

刀で切つた音の後、ルミナーレの後ろに現れたのはなんとザギイだつた。

「なんて間抜けな顔してやがんだ。こんな斬つて斬つて粉々にす

ればいいだろ？」「――

「うん。」

ザギイが何時になくルミナーレを怒鳴るものだからルミナーレは不思議で仕様がなかつた。

「後ろは任せたぞルミナーレ！」

ザギイがルミナーレに背中を渡した。

「ううん。」

ルミナーレもザギイに背中を渡した。

グサツ

「――？ 何……これ……かた……な……？」

音と共にルミナーレの腹部へ刀が背後から刺さつた。

「……？ ザ……ギ……イ……？ ？」

ルミナーレがその刀をたどりていいくとザギイへたどり着いた。

ズボ

刀が抜けるとルミナーレは、力が抜けその場に膝をついた。

「な……んで……？」

刺されたところからは血があふれ出ている。

「ザギイ……操られ……てるの……？」

ルミナーレが下からザギイに聞くと

「操られてなんかいねえよ。」

「じゃ……あ……なん……で？」

ルミナーレは腹部から出る大量の血を手で抑えているが全て抑えるには無理がある。

「何で？ 分かんねえのか？ はあ。 これだからお前は……面倒ねえな。簡単な話だ。俺はお前を裏ぎ」

「嫌あああ――それ以上……言わないで……そんなこと……言わないでえ……」

ザギイが“裏切つた”的言葉をうどじたとき、ルミナーレがいきなり耳をふさぎ悲鳴をあげた。

そして泣きじやくつた。

「嫌あ……ヒツ……裏切ら……ない……でえ……もう……ヒック……一人は……嫌……  
だあ……。」

「あらあら。昔を引きずつているのね、カリネ・ムリネット口。」

「嫌あああーその……名前で……ヒツ……呼ば……ない……で……え……」

バタン

そこでルミナーは気を失つた。

## 裏切り（後書き）

ザギイの裏切り！

弱弱しいルミナーレでした。

次回は、やつとルミナーレの過去話！

山奥の大きなお屋敷。そこには家族や召使い達に囲まれて無邪氣に笑う女の子の姿があつた。

少女の父親は裏社会で結構顔の効くお偉いさんだつた。母親はジヤンネパ人女性で、長く伸ばした黒髪がとても綺麗で、美人と評判だつた。

ここはムリネッロ一家のお屋敷。ムリネッロは代々忍者の家計で、そして代々ナイヤファミリーにつかえてきた一族だつた。

少女とその妹は、四つ違いの姉妹で、姉は母親似の黒髪で七歳、妹は父親似の金髪で三歳だつた。

二人は仲良しで、いつも一緒だつた。

その上悪戯っ子で、いつも召使い達をターゲットにしては悪戯をしていた。

そんな悪戯に手を焼かせながらも、姉妹を可愛がる召使い達。それを優しく見守る両親。

そこはとても裏社会に首を突つ込んでいとは思えないほど豊かで平凡で、そして幸せだつた。

しかし、そんな楽しい生活もある日を境に田が経つにつれて悪くなつていつた。

そんなある日だつた。少女の人生が突如変わる日が來た。

「出て行け。」

それまで優しかつた父と母が、いきなり血相を変えて彼女を屋敷の外へ追い出した。

何も知らない少女はそれに反抗した。

「何で？何で私が出て行かなきやいけないの？お父さんは？お母さんは？ヤダよ。私ここに居る！」

「五月蠅い。お前など必要ない、邪魔なだけだ。出で行け！」  
バシン

父は今まで見たことない怖い顔で彼女の頬を叩いた。  
少女は母のほうを見た。

母も今まで見たことない冷たい目で彼女を見ていた。  
父や母だけではない、屋敷に居たもの全員が少女に冷たい目線を向けた。

そして口々に「出で行け」と言う。

少女は耐え切れなくなり、屋敷を飛び出した。

何故？何故あんなに優しかった人たちがここまで自分を嫌ったのか。  
裏切ったのか。

少女は泣きながら山の中を闇雲に走った。

今まで屋敷の外に出た事がない少女は自分が何処に居るか分からず、  
外の世界はどんなものか知らず、ただただ好きだった人たちに裏切  
られたことに心を痛め、泣き続けた。

どれくらい泣いていたか分からない。今自分が何処に居るかも分か  
らない。少女が気付いたのは日が落ちた頃だった。

空には星が輝き、光をくれるのは月のみ。  
静かな夜だった。

そして、少女の心の中も静かだった。

何も考えたくない。それが少女の望みだった。  
何も考えずにただボオッと月を眺めていた。

ガサガサ

いきなり聞こえた音に少女は反射的にクナイを構えた。

少女はムリネッロの一人である。つまり、幼い頃から忍者の教育は  
ちゃんと受けてきた。

そして父や母に

「ムリネッロ一族の歴史上最も強い天才だ。」

と言われた。

少女はそれが嬉しくて、毎日毎日練習した。勉強した。  
もしかしたら誉められる事よりも、みんなの笑顔が嬉しかったのか  
かもしれない。

だから一生懸命練習した。勉強した。

そして今では大人五人を一気に簡単に負かす事の出来るようになつた。

だから少女には自身があつた。

しかしそれはいつもの少女だつたらの話である。

今の少女は衰弱しきつていた。

家族に裏切られたこと。皆に裏切られたこと。

全ての悪夢が少女を襲い、それが全て少女への負担になつていた。

正直言つて今の少女に大人を倒す力、いや、戦う力などないだろう。

少女は怯えていた。

だが、その音の犯人は猫だつた。

きっと野生の猫だろう。

所々汚れていた。

しかしそれにも負けない毛の色、黒い毛があつた。

「あなたも一人なの？私も一人なの。おんなじね。」

少女は猫に笑顔を向けた。

猫は「ミヤア」と返した。

グウウウ……

少女の腹の虫が鳴いた。

そういうえば、家を出てから何も食べていない。

食べ物の取り方。食べられる物と食べられない物。食べ方。全て少

女は知っていた。だつてあれだけ勉強したのだから。

しかし、どんなに腹の虫が騒(ご)うが、少女の喉は何も受け付けなかつた。

ただただ、泣くことしか少女は出来なかつたのだ。

だが今なら何か食べられそうだ。

(そこいら辺に池はないかな？)  
そう思い、少女は動き出した。

その場所を少し行つたところに池はあった。

少女はクナイで魚を取り、火を熾してそれを焼き、食べた。  
(ここは何処だろ？)

闇雲に走つて来た場所で泣き、カンで来た場所で魚を捕つた。  
何処だか分からぬ。

一生このまま過ごすのだろうか？

そんなことならいつそ死んでしまいたい。

少女を更なる不安が包み込む。

(？あれは…けむり…？)

そんな時少女は向こうから立ち上る煙を見つけた。  
何かが燃えているらしく、黒い煙だ。

もしかしたら人が居るかも知れない。

そんな希望をもつた少女はその煙のほうに走つた。  
それが少女を更なる暗闇に落とすものだとは知らずに…

少女が行き着いた場所は燃えている屋敷だった。

「これは…家！？」

そう。燃えていたのは少女の家だつた。

数日前、少女が飛び出した家。

「こりや良い眺めだ！最高だ！！」

いきなり聞こえた声に少女は身を隠した。

「しかしサディア様、あの例の娘は居ませんでしたね。あの、天才と謳われた少女。」

「ふん。別に良い。あいつはいずれ俺の物になる。あの力を使って裏社会のトップになるんだ。今回はこのムリネッロを落としだけでも良しとしよう。」

そう言って奴らは帰つていった。

（……お父さんや皆を殺した……の？私を使つ？お父さんは……皆は……これを知つてて？？）

あの裏切りは実は、優しさだった事を知つて、少女の瞳からまた滴が落ちた。

今度は悲しみではない。憎しみだつた。

皆を殺したあいつらが憎い。

そして何より、皆を信じられなかつた、皆を守れなかつた自分が憎い。

「お……姉……ちや……ん」

そこへ自分の妹が地を這いつくばつて來た。

「アキ……ネ？アキネじゃない！……どうしたの？そんな血だらけで。

アキネには炎で火傷したとは思えない傷がいくつもあつた。

「さつきのひとたちが……みんなを……こうしたあとに……おやしきに……ひを……つけて」

「もういいよ！何も喋らないで……」

ボロボロの妹が喋つてゐる途中で少女はそれを止めた。

だつて、見ていられなかつたから。それ以上、自分の妹が傷ついていくのを……。

「お姉……ちゃん……これ……お父……さんが……お……姉……ちゃんに……つて……妹は所々汚れたトランクを少女に渡した。

「みんな……いつしょう……けんめい……たたかつてた……よ。そしたらね……お父さん……が私だけ……にがし……たの『お姉ちゃんにこれを届ける』……つて。」

ゲッホと妹は吐血しながらも話した。

「アキネ……もう喋らないで……」

妹を心配する少女は妹の手を握り、涙を流す。

「あのね……おね……えちゃん。私……むこうに……お姉ちゃんにあえて……うれし……かつた……よ。」

「アキ……ネ？嫌ああ！アキネエー……」

最期には聞き取れないほど、妹の声は小さくなつていて。

## 嘘と眞実（後書き）

次回はルミナーレの戦いです。  
駄作ですが、おつきあいください。

「ア…キ…ネ…。」

「氣を失つてゐるルミナーレの眼からは一筋の涙がこぼれた。

「あら、黒猫さん。氣を失いながら泣いてゐるわ。それにしてもシエータ、さすがとても上手かつたわよ、変化。」

沙梨華はそう言って、自分の隣にいる男に話しかけた。

「当たり前です。一度ザギイには会つたことがありますし、そのときこの人も居たと思ひます。だからとつても楽だったです。」

「ふふふ。『見下しのシエータ』さんには『鬼神のザギイ』さんは簡単だつたのね。」

そう。この少女、シエータは、先程ルミナーレを裏切つたザギイだつたのだ。

つまり、本物はまだ『見下しのフォート』と戦つてゐるのだ。

「お姉ちゃん…！」

そこへライヤナがやつてきた。

「あの娘は！？お前たち、とつ捕まえておしまい。」

沙梨華はライヤナを見つけると、部下に捕らえるよつに命じた。

「ライヤナ様！こには私どもが守ります！早くその方を…！」

ダダダダダダ

マシンガンを持つた召使い達が沙梨華の部下を倒していく。

「お姉ちゃん！お姉ちゃん…！」

「うう…ア…キナ？」

ルミナーレはよづやく氣を取り戻した。

「お姉ちゃん！ルミナーレお姉ちゃん…！」

「…」

（私は…ルミナーレ・ビジゴ。他の誰でもない。やつ。カリネでも…何でも、ない。）

ルミナーレはライヤナの一言で今の自分を取り戻した。

「大丈夫。ありがとう、ライヤナ。」

ルミナーレは微笑み、ライヤナの頭を撫でた。

「ライヤナをお願い。」

ルミナーレはスッと立ち上がると、ライヤナを召使い達に任せ、沙梨華の前へ出た。

「よくも騙してくれたわね。これじゃあ『黒猫』の名がすたるわ。」

「そう。ならどうするの?」

「フッ。決まってるじゃない。知ってる奴を殺る。それだけでしょ?」

先程間でのルミナーレにはなかつた、どす黒いオーラと快樂があつた。

「……つ……なによ。さつき私におそれてたのに生意氣言つものじゃないのよ!」

ルミナーレのどす黒いオーラにおそれ、沙梨華は吠えた。

【骸骨の怨念】

沙梨華<sup>ギアツチオ・アルマ</sup>が扇子をひっくり返すとルミナーレを屍が囲つた。

【氷剣】

ルミナーレが印を結ぶと刃が氷という美しい氷の剣が現れた。ザンツ音と共に屍が一つになつた。

「死者の弱点は分かつた。さつきそこに居る偽者が教えてくれた。

粉々にすれば、元に戻る事はない。」

ルミナーレは笑つてゐる。何かのスイッチが押されたように、さつきとはまるで別人だ。

トコ…トコ…

不気味な笑みを浮かべ、ルミナーレが近づいてくる。

沙梨華もショータも恐怖で動けない。

「ショータ! ほおつとしてないで、何かしてちょうだい!」

「……わつ分かりました、沙梨華様!」

【操り（ラヴオラーレ）】

そう言つて、オカリナを吹き出した。

「うう……」

それを聞いた、ルミナーレが頭を抱えて、苦しんだ。  
しかしそうにそれはなくなり、棒立ちになつた。

そのルミナーレの目は虚ろで、気味悪いものだつた。  
オカリナを吹き続けるショーダのほうに、ルミナーレが近づいて  
つた。

そしてそのまま、ショーダを刺した。

「きやああ！」

ショーダが悲鳴をあげた。

「私に操りなんて聞かないの。」このルミナーレ・ビジュには、「

「ああ……」

ショーダの声は次第に小さくなり、最後は消えてなくなつた。

「動かないで！」

「？」

沙梨華の声に反応し、沙梨華を見た。

「動かないで。一步でも動いたらあの娘を殺るわよ。」

「……ライヤナを？ ふーん。殺れば？ 出来るもんなら……ね。」

見るとライヤナが屍に捕まつている。

「おつお姉ちゃん？」

ライヤナが不思議そうにルミナーレを見ていた。

しかしルミナーレは、それには何も反応しなかつた。

むしろ、笑つていた。ショーダの返り血を拭きもせずに。

それがまた、沙梨華に恐怖を覚えさせた。

“スツ”とルミナーレが膝をついた。

「動かないでと言つたはずよ。」

“一步でも”でしょ？ 私はまだ一步も動いてないけど。

【巻きつく木】  
アルベロ・アッシュウォルジェルスイ

ルミナーレは印を結び、手を床についた。

見ると、屍の足元から気が現れ、屍に巻きついていた。

バキ ボキ

その力は強いらしく、屍の体は見るも無残な姿になつていった。

「うつ…忍術ね…いいわ。私が直々に相手してあげるわ。」

沙梨華は冷や汗を搔きながらも、強気な事を言つていた。

「ふーん。死んでも知らないよ。まあ、生かそうとなんて思つてないけどね、小母さん。」

ルミナーレが黒い笑みを浮かべながら、沙梨華を挑発した。

「なつ何ですつてえ！？」

“小母さん”と言つ言葉に沙梨華がキレた。

ガンッ

そして沙梨華は、隠し持つていた短刀でルミナーレに襲い掛かつた。そしてそれをルミナーレは動くことなくクナイで受け止める。

「そうやつて初めから来てくれればいいのに…もしかして自分を汚したくない人？小母さん。」

ルミナーレは更に挑発する。

「年上を舐めるものじゃないのよ。貴女より十歳は上なのだからね。」

沙梨華はかろうじて笑つてゐる状態だ。

「へえ。じゃあさ、年下も舐めると痛い日遇つよ？それに、十歳年上つて…自分で“小母さん”て言つてるようなもんだよ？」

「なつ！」

沙梨華の短刀に更に力が加わった。ルミナーレは負けずと力を加えた。

ザンッ

二人は離れた。

ガクッ

膝をついたのは沙梨華だった。

「何…をされ…たの？」

沙梨華が不思議に思うのは当たり前だった。何故つて…だつて彼女はただ離れただけなのだから。

ただ後ろに飛んだだけなのだから。

痛みも何も感じなかつた。

「まさか…忍術？」

「まさか。そんな術知らないよ。まあ“金縛りの術”くらいは知つてるけど…ね。」

「じゃあ…何…を？」

「簡単よ。このクナイには即効性の猛毒が塗つてある。それだけ。「え…?」いつ…したの?」

「さつき。離れた時にね。」

「痛みなんて…感じなか…つたわ。」

「もちろんよ。私はプロ。それぐらい当たり前。」

「ガハツ…ハアハア。」

サリカは吐血した。

「苦しいみたいだけど、大丈夫だよ。多分そろそろだと思うから。それじゃあね。そうそう。“負ける”なんて考えちゃダメだよ。心が折れた時点で負けなんだから。まあ、今言つても意味無い…か。」  
ドサツ

音と共に沙梨華は倒れた。

「お姉…ちゃん…?」

「大丈夫だつた? ライナ。」

ルミナーレはライナに近づき、微笑んだ。

「さつきの…だあれ?」

ライナの眼は恐怖でいっぱいだつた。

「え?」

「さつき戦つていたのは…お姉ちゃん?」

「うん、そうだよ。どうして?」

「だつて…すごく怖かつたよ…。」

ライナは怯えている。

「……。あれが本当のルミナーレだよ。ごめんね。」

ルミナーレはライナの頭を撫でながら答えた。

「やうだ、ライヤナ。あの結界…どうやって解いたの？」  
ルミナーेは一番の疑問をライヤナに聞いた。

「え? 結界なんてあつたの?」

「ううん。」めん、今の忘れて。」

ライヤナのそのセリフに、ルミナーेは驚いた。  
(確かに仕掛けてきたはずなんだけど…)

自分の記憶をもう一度探つた。

「さてと。それじゃあ、ザギイの所に行かなきやね。」  
ルミナーेの顔が真剣になつた。

「ザギイお兄ちゃんの…所?」

「うん。相手はあのフォートだし…早くしないと。ライヤナはここで待つててね。」

「…う…うん。」

ライヤナは少し淋しい顔をした。

「大丈夫。すぐに戻つてくるから。だから待つててね?」

「…うん!」

ライヤナは笑顔で答えた。

それを見たルミナーेは、そこを立ち去つとしたが、振り返り、  
もう一度ライヤナのほうを見て

「あ、そうだ。ねえライヤナ。一つ訊いていい?」  
と尋ねた。

「うん。」

「ライヤナつて

「

昔と今（後書き）

次回はザギィ～ソフォート戦です！  
まだまだお付き合いください。

「ねえねえ、僕ねえ、一つだけえ、分からぬことあるんだあ。  
それはねえ、君があ、テネブラに入る前え、何をしていたかあ、な  
んだあ。」

「！！」

ドクン…ドクン

ザギイの心臓の音は大きくなつていた。  
サツ

「何に怯えてるのあ？」

フォートがザギイの懷に入つてきた。

キイイイン

互いの刀が響く。

「早くしないと、僕があ、俺に、なつちやうぜ？」

フォートの声は入り交じついていた。

子供っぽい高い声と、殺人衝動の入つた太い声。

それはザギイを更なる恐怖へ陥れる。

（きつと今のザギイじゃフォートには勝てない…豹変するしか…。  
でもザギイをどうやって説得させよつ…。きつと…つうん、絶対ザ  
ギイは豹変することを拒む…）

ルミナーレはザギイをどう納得させるか考えながら、長い廊下を走  
つていた。

【鬼牙】  
ガイモーニコ・テンテ

ザギイの放つた斬撃は、宙を飛んだ。  
飛び斬撃。

それはザギイの得意技だった。

【鬼牙】  
〔アモニコ・テンシ〕

「！？」

ザギイは目を見開いた。

フォートが、さつきザギイが使った技を使つたからである。

「驚いたあ、つていう、顔をしているな。驚くう、必要はないんだ  
だぜ？」

「……」

ザギイの頬に冷や汗を搔くのを感じた。

鳥肌を立つとは、このことだと、強く感じた。

「僕はあ、『『写しのフォート』』。何でもお、写す力があ、あるんだ  
ぜ？驚くことはあ、何もねえよ。」

殺したい……ころしたい……口口シタイ……殺シタイ……

（来るな……来るな……来るな……）

ザギイは自分と戦つていた。

「僕ねえ、お前の中にい、獣がいるつてえ、聞いたの。お。でねえ、

それがすじく見たいなあ。」

（やめる……やめる……やめる……）

“ガク”とフォートの首が垂れた。

「あーあ。お前が遅せえから、俺が先に豹変しちまつたじやねえか。

「フォートは禍禍しい殺氣を放つた。

ガン

フォートがザギイに襲い掛かった。

さつきよりも更にスピードがあがつていて。

「早く豹変しねえと、お前、死ぬぞ。」

フォートの顔付きが変わっていた。

（何でここには豹変しても意思を持つていられるんだ。俺は……俺は

!

表と裏（後書き）

次回はザギィの過去話です。

## 大切な人

イタリーノの豊かで小さな町。そこに一人の男の子が生まれた。しかし両親は、何かが気に食わず、その子を捨てた。

そしてその子は、学校兼孤児院に拾われた。

しかし、孤児院もその子を嫌つた。

何故つて、それはその子の目付きが、子供とは思えないほど悪いからだ。

それだけではない。泣きもせず、怒りもせず、何を考えているのか分からず、何も話さないからだ。

でも孤児院が子供を捨てる事は出来ない。

だから仕方なく、その子の面倒を見た。

面倒を見たといつても、最低限の衣食住。

そしてその子が大きくなるにつれて、周りの人間は近寄らなくなつていった。

最終的にはその少年を虐めるようになつた。

だが少年は前から変わらず、泣きもせず、怒りもしない、無表情だつた。

あの言葉を聞くまでは……

その日はいつもと違つて、朝から雨が降つていた。

少年はいつも通り、何もせず部屋の隅にいた。

そこへ一人の少年が近付いた。

二人の少年は十二歳で、少年より四つくらい上だった。そして虐めつ子だつた。

「オイ。」

少年に名前は無かつた。

拾われたが、誰にも相手にされなかつたので、名前なんて付けてもらえなかつたのだ。

「お前、親に捨てられたって知つてたか？」

「……！？」

今まで何にも反応しなかった少年が、初めて反応した。

「ここにいるやつはほとんど、親が死んだとか、一緒に居られないかとだけど、お前だけ、捨てられたんだぜ。」

少年が反応したのが面白かったのか、二人の少年は説明した。

「まあ仕様がねえよな。お前“化物”みてえだもんな。」

二人の少年は笑つた。

“化物”

その言葉に少年の身体が反応した。

殺したい… ころしたい… 口ロシタイ… 殺シタイ…

少年の身体は、今まで凍つっていたんじやないかと言つほび、血が騒  
いだ。

少年は立ち上がり、近くにあつた鉄パイプを手にとった。  
そしてそのまま一人の少年を殴つた。

二人の少年は、後頭部から大量に血を流し、倒れた。

周りの人間は何が起こつたか分からなかつた。

ただ一つ言えることは、少年が一人の少年を殺したといふこと。  
少年が顔を上げた。

今まで無表情だった少年が笑つていた。  
そしてその目は獣と化していた。

血を求める、獣と…

「きやああ

叫ぶ前に殺していく。

数十分後

その孤児院から何一つ音がしなかつたといつ。

孤児だけでなく、学校に通う子もいるので、五十人近く居る孤児院。

雨の日だろうと子供が多く、騒がしい孤児院。

そこから何も音が聞こえないと言う事は異常だった。

その真実を知っているのはこの世でただ一人。

そう。あの少年だ。

だつて少年以外は全員、喋ることが出来ないのだから……

少年は孤児院を出て、まっすぐ歩いていった。

幸い雨の日なので、人々は外に出ていない。

受けた返り血は降っている雨が落してくれる。

少し歩いて、少年はある一つの家の前で止まった。

そこは少年の生まれた家だつた。

それは少年が知っているはずのないこと。

そう。少年を動かすのは……本能だつた。

ドンドン

少年はドアを叩いた。

暫くして、ドアが開いた。

「はい。どちら様ですか？」

中からは一人の女人人が現れた。

少年は何も答えなかつた。ただそこに立つてゐるだけだつた。

「……あなたは？」

女人人が少年のことを言いかけたとき、少年はその人を殴つた。

女人人はその場に倒れた。

しかし、殴りが浅かつたのか、まだ生きていた。

彼女が言いかけたことは、少年が自分の息子だつた事だつた。こんなに小さい町のことだ。

いくら捨てたからといって、この町の中で、会わないはずが無い。

「ううつ……」

少年は女人を踏み、家の中に入つた。

そしてもう一度女人の前に現れた時、少年の手に握られていた物は……包丁だつた。

きっと台所から持つてきたのだろう。

女人の顔は青ざめた。

彼女の中で『殺される』と警報が鳴つたのだろう。

女人はそこから逃げようと立ち上がるうとするが、さつきの衝撃で目の前が眩んで立てない。

叫ぼうとするが、恐怖で声が出ない。

グサツ

そしてそのまま、息絶えた。

少年は死体をそのままにして、包丁を持ったまま一階へ上がつた。

二階へ上がつていて、奥から一番目。

その部屋からは音楽が流れていた。

それは優雅なクラシックだつた。

普通の人なら心が安らぐような音楽。

しかし、血を求める少年に、そんなものは耳に入らなかつた。

ドアを開けると、一人用のソファーに一人、男が座つていた。

「ノックぐらいしなさい。」

そう言って、ドアのほうを見た。

するとその男は目を見開いた。

それは、少年が実の息子が立つていていた事。

そして、血まみれの包丁を持ち、返り血を浴びている」と。

下には自分の妻が居たはずだから、少年の返り血は自分の妻の血と判断したからだ。

男は護身用の拳銃を瞬時に構えた。

少年はそれにも、応じなかつた。

少年が地面を蹴つた。

それとほほ同時に男が撃つた。

しかし少年はそれを軽々と避け、男を刺した。

その軽々とした身のこなし、鋭い剣術。

それはまさに、プロから教わったとしか思えないものだつた。

しかし少年は、ずっと孤児院に居たため、教わっているわけが無い。

つまり、根っからの“殺し屋”なのだ。

実の両親の返り血を浴びた少年は、そのまま外へ出た。雨はまだ、降り続いていた。

そして、次第にそこには、人が集まり始めた。きっと、さつきの銃聲音を聞いたからであろう。

そして少年を見るたび、騒ぎ出す。

「“化物”」と言つて。

それを少年は殺していく。

警察が出てきても意味が無い。

それにこんな小さな町の警察なんて、たかが知れている。

少年を止められる物など、この町には居なかつた。

一時間。

たつたそれだけの短い時間で、その町は滅びた。

たつた一人の、血まみれの少年を残して…

雨は未だに降り続いていた。

少年は鍛冶屋へ行つた。

この町の鍛冶屋は祭りの時、神に備える、神剣を磨いでいる鍛冶屋だ。

本業ではなく、副業だつた。

少年はその神剣を取り、腰に挿した。

神剣とだけあつて、刃先はとてもよく、切れ味も最高だつた。  
それは鞘と柄が黒く、刀は鋭く光つていた。

そしてそのまま、森へ入つて行つた。

こんなに小さな町でも、さすがに一日で滅びた事により、他の町では噂になつていた。

人が死んだのは、誰かに殺されたからだ。

それは、あの光景を見れば分かる。

しかし分からるのは、犯人とその動機。

それが分からぬ為、他の町の人は怯えているのだ。

だが、一番分からぬのは、町を滅ぼした日にちだつた。

後一日も待てば、あの町では伝統的な、年に一度の大きな祭りがあつた。

それは、町の人は全員参加で、町の人のみ。  
という、それはとても好都合だつたはずだ。  
しかし犯人は、その一日前に行動を起こした。  
それが一番の謎だつた。

答えはこう。

犯人は、あの少年一人。  
動機は、血を求めたから。

日中の謎は… その日に“化物”と言われたから。  
こんなに簡単… いや逆に難しい答えだつた。

他の町がその事件で騒ぎになつてゐるとき、少年は森を抜け、隣の町へ行く途中だつた。  
さすがに雨は止んでいた。  
しかし少年はまだ、獣であつた。

町に入るとき、門番をしている警官に止められた。  
「ちょっとキミ、その腰に挿しているものは何だ。」  
「ドサ

警官が倒れた。

いや……死んだ……殺された。少年……に。  
はたから見れば、警官が倒れただけだった。  
しかしそのままの直後、警官の腹から血が吹き上がった。  
「きやああ！」

近くでそれを見た町の人人が叫んだ。

少年は笑みを浮かべ、斬つていく。

三時間後。

また一つの町が滅んだ。

前の町より大きかつたため、時間がかかつた。  
それに、他の町へいける道がたくさんあるので、生き残った人もいるだろう。

しかし今、この町に居るものは全て消した。  
全て消した。……つもりだった。

パチパチパチ

いきなり少年の後ろから、拍手が聞こえた。

「凄いねー。お前が、町潰しの犯人？」

男は感心するように少年に言った。

少年はただ、心の無い瞳で、その男を写している。

「へえー。こんな男の子だつたの。」

男は楽しそうに少年を見ている。

「さつき、お前の殺つてる所見たけど……なかなかのものだね。でさあ、俺と戦わない？俺、結構強いよ？」

男が笑つて少年に訊く。

少年は「弱いやつらばかりで詰まらない。」と思つてゐたところなので、笑みを浮かべて、男を見た。

ガン

それを合図に、互いに抜刀し、戦闘が始まった。

「ふーん。やつぱ、綺麗だね。」

少年はそんなことには耳を貸さずに、襲い掛かる。

「誰から習つたかは知らないけど、そんなんじや俺には勝てないよ。

少年が弾き飛ばされた。

「隊長！遊んでないで、早く任務の方を片付けてくださいよ。」

建物の上から、男の部下に見える男が、現れた。

「えー。詰まんないなー。まあ仕様がないか。この任務が終われば、いつでもできるしな。じゃ、いつちょやりますか！」

男の顔つきが変わった。

そして少年の目から男が消えた。

それと同時に、少年の記憶が途絶えた。

「お、起きたか？」

少年が目を覚ましたのは、見知らぬベットの上だった。

少年の目は、もう獣の目ではなかつた。

普段の少年の目に戻つていた。

「さつきは悪かつたな。俺の名は、ラメッタ・フェンデレだ。年は二十六。趣味は部下と遊ぶことで、特技は剣術だ。お前は？」

「…………。」

少年は黙つていた。

「もしかしてお前、喋れないの？」

少年は首を振つて、否定した。

「名前が……ない。」

少年は俯いていった。

少年は俯いていった。

「……やつぱ、わつか！そりゃあ嬉しい！！」

ラメツタは、謝ると思いきや、逆に嬉しがった。

「？？」

少年は、頭の上にクエスチョンマークを浮かべ、不思議そうにラメツタを見ている。

「ああ。悪い悪い。やつぱてえのは、お前のことを調べても、名前が出てこなかつたからだ。つてことで、俺が付けてもいいか？」

ラメツタは笑顔で訊いた。

少年は戸惑つた。

「隊長。その子、戸惑つてますぜ。もう少しちゃんと説明してあげんど。」

「……俺は、お前が気に入つた。お前、帰るとこりなーだろ？だから今から、ここがお前の家だ。で、ここにいのヤツらは、全員お前の家族だ。どうだ？」

ラメツタは少し考え、少年に説明した。

少年は驚いたような顔をしている。

「……ないのかよ。」

「ん？」

顔を俯せ、少しして、少年が口を開いた。

「怖くないのかよ。俺が……俺が怖くねえのかよ！町を潰した記憶はある。でもあれは俺じゃない！調べたんなら分かつてんだろ。俺がどんなヤツか。それを知つてて、怖くねえのかよ！」

少年の叫びが部屋中に響いた。

しばらくの沈黙が続く。

「怖くなんかないよ。」

その沈黙を破つたラメツタは、真剣でそして温かい目差しで、少年を観た。

「お前のどこが怖いんだ？確かにあれは、お前自身の意志でやつた訳じゃない。でもあれだってお前だ。俺達のことを心配するお前、町を潰したお前、どっちもお前だ。それでいいじゃないか。もしあ

あなたたら俺達が止めてやるから心配すんな。な？」

ラメッタは微笑んだ。

「いやラメッタだけでなく、その場にいた全員が少年に笑みを向けた。

そのとき少年は、初めて人の温かさを感じた。

「ということで、今からお前の名前は、ザギイ・フェンデレだ！」

「何でザギイなんだい？」

いきなり出てきた名前の由来を一人の男が聞く。

「ん？ だつてなんだか、カツコイイだろ？」

ラメッタはニタリと笑った。

「あのねえ…。」

「それでいい。」

黙つていた少年が、口を開いた。

「それが…いい。」

顔を上げた少年の目には、光が灯つていた。

今まで、人を信じられなかつた、傍にいてもらえなかつた、孤独でガラス玉のような目だつた少年の目は、喜びと信頼に満ち溢れていた。

「お前さんがそういうなら…いいか！」

その男は、納得したように手をたたいた。

「よつしゃ！ じゃあ遊ぶか…！」

「おおおーー！」

ラメッタが言うと、その場にいたラメッタの部下は、「何して遊ぶか。」などと言つて、外へ行つてしまつた。

「ほら、ザギイも行こうぜ？」

「え…？」

初めて他人から名前を呼んでもらい、戸惑いを隠せない少年。

「俺達は仲間だ。いや、家族と思つてもいいぞ。」

ラメッタは自信に満ちた顔で、そう言つた。

「早く来いよ、隊長！ ザギイ！」

外から部下の声が聞こえた。

「な？ さ、行こう。」

ラメッタに手を引かれ、少年は外に出た。

この時初めて、少年 ザギイに仲間といつものができた。

それは初めてザギイに優しく接してくれた、家族だった。

ラメッタと出会つてから一一日。

ザギイが起きたのは、午前六時三十分頃。

ザギイはベットから降り、廊下へ出た。

しかし廊下にも誰もいなかつた。

昨日来たばかりで、どこへ行つたらいいか分からぬ。

仕方なく部屋に戻ろうとしたとき、声を掛けられた。

「いたいた。」

声を掛けたのは、ラメッタだった。

「何？ たつ 隊長？」

ラメッタのことをなんて呼べばいいか分からぬザギイは、ラメッタのことを隊長と呼んだ。

「隊長つてお前..。俺のことはラメッタつて呼べ。お前は俺の部下じゃない、家族なんだから。な？」

ラメッタはザギイの頭をポンと叩いた。

ザギイは頷いて答えた。

「じゃ、食堂に行こうか。腹減つてるだろ。」

そう言つて、ラメッタは廊下を歩き始めた。

そのすぐ後ろをザギイがくつついていく。

廊下の突き当たり。三メートル近くある、両開きのドアを開けると、活氣のある声が行き交つていた。

食堂。そこでは大勢の人が、朝食をとつていた。

その場は、和気藹々とし、暖かい雰囲気に包み込まれていた。

「おはよう隊長。」

「おはよう、ザギイ。」

そんな声が次々に飛び交っていた。

“ザギイ”

その言葉を聞いたザギイは自然と笑顔になる。それを見たラメッタは、嬉しそうに笑っていた。

ザギイはラメッタに食堂の使い方を教わった。

料理長のカッタルタは、

「Guten Morgen.」

と、ドイツエラ語で挨拶をしてきた。

「ぐーーんもるげん？？」

聞きなれない言葉に、ザギイは首を傾げた。

「ドイツエラ語でおはようって意味さ。」

カッタルタは笑顔でザギイに教える。

机に座ると、大勢の人が押しかけてきた。

男の人でだけでなく、中には女人の人もいる。

そして一気に話し掛けてきた。

「ザギイ、お前剣術すごいんだってな。」

「久しぶりに子供見たわ。可愛いい！」

「意外と大人しそうだな。」

などと四方八方から声が聞こえる。

今まであまり人と話したことのないザギイは、いろいろなところから聞こえる声に、だんだん頭がくらくらしてきた。

「ストップ！！」

隣に座っていたラメッタがザギイの様子を見て、部下を止めた。

「何スか？隊長。」

「何スかじやねーよ。ザギイが可哀想だらうが。ラメッタがそれぐらい分かれといつ口調で言つ。」

自分のことを気に止める皆。

自分のことを思つてくれるラメッタ。

ザギイは、それがとても嬉しかつた。

今まで感じたことのない、持つたことのない、“仲間”といつものを持つことができたのだ。

朝食を済ませ、部屋に戻ろうとしたとき、ラメッタに呼び止められた。

「お前、来たばっかりで、何処に何があるか知らないだろ？だから案内するぜ。」

ザギイは目をキラキラさせた。

何せ、こんな大きい建物に入つたこと自体初めてで、内心ものすごくわくわくしていたのだ。

「隊長ばっかりずるいっスよ。俺らも一緒に行かせテもらいまス！」  
そう言つてやつて来たのは男三人に女一人。

「つてこトで、俺は戦闘班（コンバット班）のガリオだ。」

真ん中のリーダー的な存在な男が自己紹介を始めた。

「僕は情報班（データ班）の蒼翠（そうすい）だ。」

ガリオの右隣の眼鏡を掛けている黒髪の男が、淡々と喋る。

「俺は研究班（リサーチガート）のジャロットだ。よろしくな、ザギイ。」

ガリオの左隣でだらしなく白衣を着、頭にはバンダナをした男がザギイに笑いながら言つた。

「あたしは医療班（リサナート班）のセレネーつていいますう。」

一番左端でこちらも白衣を着ている。しかしジャロットと違つて、ちゃんと着てている。四人の中で唯一の女性で、金髪の髪を一本で三つ編みにしている。

「お前らなあ…仕事はどうした。」

ラメッタが少し怒り気味に言つた。

「ほらな言つただろう？ そんなことしたら隊長に怒られるつて…。  
蒼翠が呆れたように言つた。

「じゃあ付いてこなければいいダルーが。それにいつそんないと言ったンだ？」

ガリオが威張つて言つた。

「さつきここに来るときガリオにも言つたはずだよ。君は知るかって返事したじやないか。」

そんなガリオにも一切動搖せずに言つ。

「してネーよ。つてか知つてルか？言葉つテーのは、相手に伝わつて初めて意味をなすンだゼ？」

蒼翠の言葉を聞いて、ガリオが憎まれ口を叩いた。

「君が言つことかい？それ。…あ、そつか。君の耳は飾りだつたね。」

蒼翠もガリオに負けないくらいの憎まれ口を叩く。

「ンだとーー？やルかテメエーー！」

「すぐ熱くなるのが君の悪い癖だ。」

「テメエは冷静すぎンだよ！」

「」の仕事は冷静な方が勤まるんだよ。

ガリオと蒼翠が喧嘩を始めた。

行動派のガリオ、頭脳派の蒼翠。

正反対のこの二人が喧嘩をするのは、日常茶飯事なのだ。

「喧嘩はやめてくださいですう。」

「あつはつはつはつは。」

止めようとするが、手が出せないセレネー。

その光景を腹を抱えて笑つて眺めるジャロット。

ラメッタはすでに諦めて、呆れてそれを見ていた。

「セ、ザギイ。あいつらのことはいいから行くぞ。」

ザギイは戸惑つたが、ラメッタが行つてしまつたので、ラメッタの方に付いていった。

「セレネー、早く來い。そいつら置いてきていいから。隊長行つちまうぞ。」

「え、えーと… ガリオ～。蒼翠～。置いてっちゃいますからねえ～。  
あつ～待ってくださいですう～。ジャロット～。」

そう言って、喧嘩している一人を残して、ジャロットとセレネーは行ってしまった。

二人がそれに気付いたのは、その十分後だったとか… そうじやなかつたとか……

「あのや…」

ずっとラメッタにくつついてきたザギイが、急に止まって口を開いた。

「どうしたんですかあ？」

セレネーがしゃがみ込んで、ザギイの顔を覗き込んだ。

「コンバツテントとか、ダートとかって… 何？」

「戦闘班コンバツテンブとかのことですか？ それはですねえ～」

「待て。」

ザギイの質問に答えようとしたセレネーをラメッタが止めた。

「後で俺が説明する。他に話したいこともあるしな。」

「分かりましたですう。」

「じゃ、行くぞ。」

建物の中にはたくさんの施設があつた。

さついた食堂。部下一人一人に与えられた、自室。蒼翠の働く情報室と情報処理室。ジャロットの働く研究室。セレネーの働く医療室。ラメッタ専用の隊長室。他にも風呂場、図書室、倉庫など、普通の人が使うような施設から、訳の分からぬ施設まであつた。そしてその全ての施設は大きく、ザギイは驚くばかりだった。その所為か、夕方には疲れて寝てしまった。

ザギイが起きたのは、早朝だった。

時計を見ると五時を指していた。

昨日、夕方に寝た所為だろう。

う う う う

サギイの腹の虫が騒いだ。

そういえば、昨日、夕飯を食べていない。

疲れきつて寝てしまつたので、食べていないので。

廊下へ出て、自分の部屋に一番近いジャロットの部屋へ行った。ドアを開けると、まだ慣れない無ぶしい光こゝりが眩んだ。

ジャロットは、部屋の奥にある自分のベットで熱心に紙を読んでいた。

る。

おそれべ資料だろ？。

ザギイは目が慣れるのを待ち、ドアを開け、静かに部屋へ入った。

「……………？」

「ううん、成つてないよ。」  
周りが静かなため、ジャロジーの顔は雖然と小声になっていた。

「お腹洞（ハラノリ）た

「裏減の二つが。昨日晩飯食の

勝手がいいが、昨日は食事でねえもんないよ、食堂行くが、

清江先生集

御覽ノサムノハニガニ

「おつ覚えててくれたんですか！？嬉しいですぅ。」

ザギイに自分の名前を呼ばれ、セレネーは喜んだ。

「つていうか、何でセレナーが居るんだ?」

ジャロットが珍しそうに、首を傾げた。

「え？ あたしは毎日居ますよ。普段は忙しくないから、カッタルタさんのが紅茶を煎れてくださるんです！ それがとっても美味しいんで

すう～。」

セレネーは恋する乙女のようと言った。

「ふーん。そうだったのか。さ、ザギイ。飯食おうぜ。俺も匂い嗅いだら腹へってきた。」

ジャロットは、自分が訊いたにも関わらず、特に興味を持たなかつた。

そしてザギイを連れて、カツタルタの方へ行つてしまつた。

周りから見れば、失礼な奴だと思う。

「Guten Morgen、ザギイ。」

「Guten Morgen、カツタルタ。」

カツタルタがドイツ語で挨拶すると、ザギイもドイツ語で返した。

といつても鸚鵡返し状態。

「お、嬉しいね。覚えててくれたんかい。じゃ、おまけでオレ特性のデザートつけてやるな！」

たとえ鸚鵡返しであつたとしても、ドイツ語で返してもらつてしまつかり上機嫌のカツタルタ。

「俺には無いんですけど、カツタルタさん。」

カツタルタ特性のデザートをもらうザギイを見て、ジャロットが不満げに尋ねた。

「無いね。元々、ザギイのために作つたんだからな。」

「え？」

ジャロットが不思議そうに、カツタルタを見る。

ザギイはすでに朝食をもらい、セレネーの方へ行つていた。

「オレにもあれぐらいの息子が居てな。あいつ見ると、息子を思い出すんだ。気付いたら身体が勝手に動いてたんだ。」

カツタルタの顔は、とても優しかつた。

それはそう、一人の息子を持つた父親の顔だつた。

「気が向いたら今度作つてやるよ。」

そう言って厨房の奥へ戻つてしまつた。

「遅かつたですねえ～。カツタルタさんと何話してたんですかあ～？」

朝食をもらい、セレネーとザギイの座っている机に座ると、早速セレネーが先程の話を聞いてきた。

「ん?特に何でもないよ。」

そうつて朝食を食べ始めた。

「ふ～ん。」

セレネーは特に気にしてないようだ。

「そうだ。あのさ、ジャロットとかつて何歳なの?」  
ザギイは気になっていたので、訊いてみた。

見た目は十代くらいなのだが、本当の歳が気になっていたのだ。

「俺達は四人とも二十一だよ。」

「あ、でも、あたしは誕生日まだなんで二十歳ですう～。」

その返答に、ザギイは驚いた。

一見、ジャロットが年上で、セレネーが年下のよう見えるのだが、実は全員同じ年なのだ。

と言つても、誕生日的に言つと、ジャロットが一番上で、セレネーが一番下になる。

「後、あたし達は同期なんですね～。」

付け加えるようにセレネーが言つた。

「どうき?～」

ザギイはその聞きなれない、意味の分からぬ言葉にクエスチョンマークを浮かべた。

「そのうち分かるようになるわ。今日辺り、隊長から話があるだろう。」

「～どつせ～につこって?」

「いや、その話は無いと思つ。」

と言つても、手を左右に振る動作は、完全に否定していた。

先程まで、優雅つぽく紅茶を飲んでいたセレネーが、いきなり飛び上がった。

「仕上げてないって…先輩に怒られるぞ。特に班長。」  
ジャロットの“班長”という言葉を聞いた瞬間、セレネーの動きが止まった。

そして班長という言葉を繰り返し、さつきよりもグレードアップしてじたばたした。

アルミナ班長にて、そんなは怖いのか？」

「怖いってもんじゃないですかーー！他の班長さんは違つて、じわじわと追い詰めてくるような怒り方なんですかーー！普段はとても素敵な方なんんですけどーー……」

「よし！あたし報告書取りに言つてきますう！…」

突然せに不一力立ち上力力

も  
。  
」

「いや……それがですね……医療室に……あるんですよ……。」  
セレネーが再び萎んだ。

「げつ！ 医療室かよ……」の時間ならアルニア班長……いるぞ？」  
「 そ う な ん で す う ～ ～ ！ で も 行 か な き や 、 更 に 怒 ら れ る ん で 、 行 つ て  
く る で す う ～ ～ 」

そう言つてセレネーは、萎れながら食堂を出て行つた。

「『しゅーしょー』さまでした。」（御愁傷様でした。）

ジャロットが手を合わせ、一礼した。

「『しゅーしょー』さま？？」

ザギイが首を傾げた。

「蒼翠が言つてた。あいつの故郷、つまりジャンネパージャ、人の不幸に際し、その時に同情するときに使う、言葉なんだつて。」

「ふーん。つて蒼翠つて、ジャンネパ人だつたの！？」

全員イタリーノ人だと思っていたザギイは驚いた。

「そうだ。ちなみに俺は、オーストリア人だ。ガリオはメーリカ人、まつ、セレネーはイタリーノ人だけどな。カッタルタさんはドイツエラ人だから、昨日も今日もお前にドイツ語で『おはよう』って言つたんだ。」

ふーんと、ザギイが納得したように首を縦に振つた。

「つまりここには、世界中からいろいろな人が来てんだ。面白いだろ？」

ジャロットが笑みを浮かべた。

今まで外の世界を見たことが無かつたザギイは、それはとてもとてもワクワクした。

「さーてと。早いけど仕事行きますかね。」

朝食を取り終えたジャロットが立ち上がつた。

「仕事行っちゃうの？ ジャロット……。」

ザギイはジャロットを見上げて言つた。

「そつか、お前一人になつちまつんだな。じゃ、一緒に来るか？」

「うん！」

ザギイは、ジャロットの誘いに嬉しそうに返答した。

ジャロットの仕事場は研究室である。

ジャロットが言うには、ここは主に武器の研究を行っている場所で、武器の開発や改良など、様々な事をしていると言つ。

「ベルダ班長、おはようございます。」

ジャロットが、部屋の奥にいる身長百九十センチくらいの男に挨拶した。

「お、今日はヤケに早えじゃねえか。しかもザギイまである。どうしたんだ？」

ベルダはしゃがんで、ザギイと同じ田線になつた。

「いや、ザギイが暇でしようがないんで、連れてきやした。いいつすよね？」

ジャロットが訪ねると、

「もちろんだ！むしろ嬉しいね！」

と大声で言つた。

午前七時。

続々と研究室に人が入つてきた。

そしていつの間にか、ザギイの周りにはたくさん的人がいた。

「おー。こんな近くで見たの初めてだよ。隊長がいないからさうに嬉しいね。」

ザギイは緊張しているのか、何も言わずにただそこにちゃんと座つていた。

「そうそう。隊長ばっかりズリーよ。隊長だからって、ザギイを独り占めしないでほしいよな。」

「うんうん。」

そのうち話の内容は、ラメッタの愚痴になつてきた。

「あの人、任務の時もだらしないらしいですよ。まあ、やるときややるらしいんですけど……ホントに仕事してんすかね？」

ある男がその愚痴を零している最中に、何人かの男が顔を引きつらせながら、仕事に戻つた。

「ほう。誰が仕事してないつて？」

その理由は、いつの間にか研究室に入ってきたラメッタがこちらに歩いてくるのを見てしまつたからだつた。

先程、愚痴を零していた男たちの顔は血の氣が引いていた。  
「いや、隊長のことなんて誰も言つて…ません…よ?」  
男達は死にものぐるいで、言い訳をした。

「じゃ、何で俺を見て冷や汗を搔いているんだ?」

ラメッタが二二二二しながら、ジリジリと追い詰める。

「ニヤ、そのおー……えーつヒー……」

「お前らも仕事しねえか！！」

「はつはいいいい！」

そういうて、やつと全員が仕事を始めた。

いや、すんませんな、隊長。

## ベルダがラメッタに謝った

いや、別にいい。それより、サギイ連れてくぞ。

「お願いします。ザギイがこじにいる」とは嬉しがりますが、班員が

すよ？

それを聞くと、ラメッタはザギイに手招きした。

た。それを見たザギイは、椅子から降り、ラメッタのところへ走ってき

まるで、主人に忠実な犬のようだつた。

そしてそのまま研究室を後にした。

その後の研究室は、嬉しさと悲しさが交じり合っていたとか……。

ラメッタの部屋は他の人の自室とは違い、家具も豪華で、そして広かつた。

かつた。

「ザギイとラメッタは向かい合」の状態で、座った。  
「ザギイ、率直に言うが、こひはテネブラファミリー、つまりマフ

「ア機関だ。」

「マフィ…ア？」

聞いたことの無い言葉に、ザギイは首を傾げた。

「マフィアって言つのはな

」

マフィアとは。簡単に言つてしまえば、裏組織である。

しかし、裏組織と言つても警察と繋がっているところもある。

警察の出来ない事、例えば殺しなどを引き受ける。

警察の銃は“脅しの銃”とするならば、マフィアの銃は“殺しの銃”と言つような感じである。

一つの組織の事をファミリーと言つが、それは組織全体の事を指すのであって、決して家族ではない。

しかし、ファミリーのボスは必ず前のボスと血が繋がっている。

これは全てのファミリー、マフィア全体の継続であった。

そして、大体のファミリーが一つの町を守つてゐると言つていいだろつ。

但し、それは良いマフィアの話だ。

やはりその世界にも悪いものは付きものである。

悪いマフィアは、略奪を繰り返す。

町を襲い、支配するか、潰すか。

そんな輩もいる。

これから先は、テネブラの話だが、大体他のファミリーのこんなものだ。

まず、ファミリーの一番上にボスがいる。テネブラの今のボスは、十五代目である。

その下に、ボス直轄の親衛隊、通称守護者がいる。

守護者は、火の守護者・水の守護者・雷の守護者・風の守護者・土の守護者と、五人いる。

火などの言葉が示しているのは属性ではなく、性格だ。

例えば、火なら全てのことに真剣に取り組み、水なら全てのことを冷静に見るなど。

そしてまた、守護者とは別に、幹部がいる。

幹部は全部で三人いて、第一幹部・第一幹部・第三幹部となっている。

この数字は、強さを表すのではなく、第一は地上・第二は海・第三は空と、それぞれ専門の場所を表すものである。

そして幹部一人一人の下に隊が三つある。

その隊のリーダーを隊長と呼ぶ。ラメッタはこの位置にいるのである。

ちなみにラメッタの隊は、第一幹部の下に属している。

隊の中には戦闘班・情報班・研究班（インダガト・レ）・医療班・料理班・生活班と、六つの班があり、その名の通りの働きをする。

それぞれの班のリーダーを班長と呼ぶ。カッタルタやベルダはこの位置にいる。

そしてこの下に班員がいる。ガリオ、蒼翠、ジャロット、セレネーはこの位置である。

これがテネブラファミリーの構成である。

また、部下と一緒に任務をこなす隊長や幹部をディヴェルリと呼び、独りで任務をこなすのをインディペンデテと呼ぶ。

ラメッタは、部下を引き連れ任務に行くので、ディヴェルリだ。

と言つても幹部には大きい任務しか来ないのだが。

一通り話しあつたラメッタが、一息ついた。

よく分からぬ言葉もあつたが、それでもザギイは真剣になつて、ラメッタの話を聴いていた。

「ザギイ、強くなりたいか？」

「え？」

ラメッタのいきなりでわけの分からぬ質問に、反射的にザギイが声を出した。

「豹変したお前はどうからどう見ても、根っからの“殺し屋”だつた。どの道、帰るところも無いんだろう。なら俺達と一緒に、マフィアにならぬいか？強くならないか？」

「強くなる…？マフィアに…なるの？」

ザギイはどこか怯えているような声で問い返した。

「そうだ。お前はもつともつと強くなれる。豹変したお前だつてコントロールできれば、誰にも負けないくらい強くなれる。ここにいるのならば、マフィアになるしかない。それ以外の人間は置いておけないからな。それとも外で暮らすか？多分独りで生きていいくことになると思うがな。それはお前の好きにしろ。」

ラメッタは真剣で、でもどこか優しい眼差しでザギイに言つた。

独りは嫌だけど、人を殺すのも嫌だ。

それがザギイの心情だつた。

「一つ言つておぐが、俺達は人を殺すために戦つてるんじゃないぞ。

「？」

ラメッタの言葉にザギイは疑問を抱いた。

「守るために戦つてるんだ。」

そう言つたラメッタは、どれほどザギイの瞳に格好良く映つたことだろう。

その強い眼差しがザギイの恐怖を打ち消した。

「俺達は“自分の何か”を守るために戦つているんだ。」

「何か…？」

「仲間、恋人、正義、信念、命、と人によつて様々だが、俺達はそれを守るために戦つているんだ。」

ラメッタは…いや、ここにいる人達は皆、“自分の何か”を守るためにそれぞののやり方で戦つている。

今まで守るものも、捨てるものも無かつたザギイには、彼らがどれほど素敵だつただろう。

「ねえ、ラメッタ。俺は何を守ればいいかな？」

「…？…フツ…それはマフィアになるつてことでいいのか？」

ザギイはその強い眼差しで、ラメッタの質問に答えた。

「そんなんにすぐは守るものは分からぬ。ゆつくりゆつくり時間をかけて、捜してみればいいぞ。」

「うん！…」

それからと違うもの、ザギイは来日も来日も剣術を磨いた。

そして一年という月日が流れ、大の大人が十人がかりでも倒せないほどに、ザギイは成長していた。

しかし、それが間違いだったのかもしれない。

『人は“何か”を守ることで強くなる事が出来る。』

後タラメツタに言われた言葉だった。

『じゃあ俺はここに居る皆を戦う。』

それがザギイの答えだった。

しかしそれがこんな悲劇をもたらすことになることは、誰も知らなかつたのだ。

「おい、ザギイ！」

「何？ラメツタ。」

ザギイが外で修行を一人でしていたときだった。

「今度の任務、一緒に行かないか？」

「うん！行く！…」

ラメツタは、ザギイを任務に誘つてきた。

実を言うと、これが初めてではないのだ。

初めての任務は、半年前だつた。

その頃のザギイは、人を斬ることが出来ず、ただその場に震えて立つていただけだつたのだ。

しかし、任務を回数重ねることに次第にその傾向は見えなくなり、

今では大の大人を十人相手にしても倒せないほどに強くなつた。

今回の任務は、“密輸会社のアジトを潰せ”と言う簡単な任務だつ

た。

だからこそ、気が抜けない物だ。  
簡単簡単などと抜かしていると、隙をつかれ、命を落としかねない  
からである。

「それじゃ行くぞ、お前等……」

「おう……」

こうしてザギイを連れて、敵のアジトに向かっていった。これが、  
悲劇の任務の始まりとも知らずに……

密輸会社のアジトは、アドヴァ海に面した、港のひとつだった。  
港沿いの倉庫の並びにそのアジトはあった。

バンッ！！

戦闘班・第一部隊がアジトの扉を突き破った。

「覚悟しろ、テメエら！ 我等テネブラファミリーが貴様らを潰しに  
来た！！」

「テネブラだと！？ かれー！！」

こうして対面戦闘が始まった。

もちろんその中にはザギイもいた。

そしてその力は相手に負けず、強かつた。

一瞬も迷うことなく、相手を斬る。

九歳という幼さを全く感じさせない、ザギイにとつて戦うことは、  
本望だったのかもしれない。

「何だこのガキ！？ “化物” だあ！！」

一人の男が叫んだ。

ラメッタ達といて、決して耳にする事の無かつた言葉

“化物

”。

その言葉は、一年前にザギイを狂わせた言葉だった。  
ガクン

ザギイの首が垂れ、禍禍しい殺気がザギイを包み込んだ。

その殺気は「殺してやる」ではなく、「殺したい」というものだ。

そしてそれは尚更、周りの人間を恐怖へ陥れた。

「うわあああ！！」

逃げ出したのは、敵だけではなかつた。

テネブラ側も、何人か逃げ出した。

それほどザギイの殺気は強いということである。

「おい、ザギイ！！」

人を殺しつづける、豹変したザギイをラメッタが止めようとした。

ガン

刀同士がぶつかり合つた。

「おいザギイ！目を覚ませ！！お前は“化物”なんかじゃない！人間だらうが！！」

ラメッタは必死に、ザギイを宥めた。

しかしそれは、ザギイに届くことは無かつた。  
この一年で強くなつたザギイに、更に元から強かつたザギイが一緒になり、一年前とは比べ物にならないほど、強かつた。  
ラメッタでも勝てないくらいに…

グサ

その音と共に、ザギイの剣先から血が垂れた。  
ザギイの剣は、ラメッタの腹部を貫いていた。

「やつと…止まつたか…。この…馬鹿野郎が…。」

そう言って、とつた行動に周りにいた人間は、目を見開いた。  
ラメッタが剣を頬りにザギイに歩み寄つたからである。

つまり、ラメッタが自分から剣に深く刺さつていつたのだ。

「正氣に戻れ…ザギイ…。俺…以外にも…仲間…を殺す…のか…？  
やめ…グア…！」

ザギイが剣をラメッタから引き抜いたとき、ラメッタが叫び声をあげた。

「隊長…！」

部下が倒れたラメッタを見て、叫んだ。

その途端、ザギイが正気に戻り、その場に膝をついた。

それを見た部下達が、ラメッタに駆け寄った。

その中で一人、ザギイに駆け寄ってきた者がいた。

それは、ガリオだった。

「大丈夫か？ ザギイ。」

ガリオは訊くが、ザギイは返事もしないで、ただただ震えていた。  
「どうしよう、ガリオ。俺…俺…ラメッタ…刺しちゃった…。俺、ラメッタ刺しちゃったよ、ガリオ…！」

ザギイは興奮していた。

そしてその瞳からは、涙があふれていた。

「オイ、ザギイ！ ザギイ…！」

ずっと首を横に振り続けているザギイの肩をガリオが揺さぶった。  
それでもザギイは、耳をふさいで首を横に振りつづけていた。  
なぜなら、その自分の名前を呼ばれることが、自分が責められてい  
るよう聞こえるからだ。

「ザギイ…」

そのラメッタの声だけには、振り向いた。

「ラメッ…タ…？」

「ザギイ…俺が…死ぬのはお前…の…所為じゃ…無いから…な…。  
これから…も…ちゃんと…生きて…いけ…よ…」

ラメッタが静かに目を閉じた。

「ラメッタ…」

その少年は、決して再び目覚める事の無いその名前をずっと叫び続  
けていた。

## 大切な人（後書き）

次回はライヤナの事実が明らかに。  
この話に長々とお付き合い、ありがとうございました。

(こいつ……なんて力してやがんだ……！)

「ふん、どうやら黙多でんのが恐こわいらしいな。  
黙多しれど死ぬつて言つてんだろうが――！」

「弱えな。あ、そういえば、あの言葉を聞かば、

「はけ? じゃあ、

## フォートが化物と言ふ

## 消された

フオートの殺氣がルミナーレに向いた。

「あんたなんか恐くない！」

「殺れるもんなら殺つてみろー！」

ルミナーレの挑発にフオートが乗つた

ル》カーレに勝ち田が無いと察したサギイが、ル》カーレを怒鳴る

「お同じ、心の御一がギドが運転からいつの間にか

卷之三

本業のことを言わざり、ササギに怯んだ。

「は？」

ルミナーレのいきなりの言葉に、ザギイはクエスチョンマークを浮

かべた。

「しなきや勝てないんでしょ。大丈夫。元に戻す方法はちゃんと考

えてあるから。」

そう言つたルミナーレの顔は、自信に満ちていた。

「でも俺、何処で暴れるか、分かんねえぞ。」

「大丈夫。それも考えてあるから。あんた達が戦い始めたら、結界を張る。だからその中で戦つてもらひ。終わつたら結界を解いて、あんたの豹変も解く。それでいい?」

「ああ。それがいい。」

ザギイはルミナーレの策に同意した。

「俺を殺ることに集中しないと死ぬぞ!」

キィイン

フォートが振り下げる刀をザギイが受け止めた。

「ふーん。やつと豹変してくれるみてえじゃねえか。」

フォートが嬉しそうに笑つた。

「ルミナーレ!」

「分かつた!」

ザギイが叫ぶと、ルミナーレは退避した。

(仕様がねえな…。来い! てめえで殺つてやる! ! ! )

ドクン

その瞬間、ザギイの目付きが変わつた。

【光の壁】

ルーチェ・バルツア

それを合図とし、ルミナーレが結界を張つた。

刀同士が響き合い、田にも止まらぬ速さで動き続ける、ザギイとフォート。

とても人間とは思えない。

一瞬、ザギイとルミナーレの目が合つた。

ルミナーレは鳥肌が立つた。

ザギイの豹変した姿を見るのは初めてではないが、最後に豹変したのは、五年以上も前。

それに、目が合つたのは、これが初めてであった。

その目は、根っからの“殺し屋”が持つことが出来ると言つても過

言ではないほどのものだった。

慣ることなんて、無理に近いだろ？

「あそこにはいたぞ！！」

ティーグレの部下達が、ルミナーレを見つけた。

その言葉で、ルミナーレは我に返った。

彼らが何も言わなかつたら、気付くことすらなかつたひつ。

バンッ

一斉に銃で撃つてきた。

「人数多いなあ……。」

【光の鏡】

そう言つと、ルミナーレの前に光の壁が出来た。しかし、壁はそこにあるだけだが、鏡は反射する。つまり、攻撃を元来た方向に、同じ速度で返す。だから敵の銃弾は全部返り討ちとなつた。

「大分減つたかな？」

しかし、何処から湧き出でてくるのか、まだまだたくさんいる。

「面倒だなあ……。」

【雷の竜巻】

電気を纏つた竜巻が、敵の集団を襲つた。

敵は感電し、竜巻で巻き上げられ、そのまま地面に叩きつけられた。それで大半は片付いたのだが、それでもしづく残つている奴らもいた。

「仕様がない……。しつこいのは、嫌われるよー。」

【闇の穴】

突然、空間に亀裂が生じ、穴が開いた。

これはいわゆるブラックホールのようなもので、ある一定のものを吸い込む。

吸い込まれたものは、跡形も無く消える。

今回は、目の前の敵だ。

そして、全ての敵を吸い込み終えると、ルミナーレはその穴を閉じ

た。

「疲れた…。」

この技は、難易度が高く、体力の消耗も激しい。ルミナーレはその場に座り込んだ。

後ろを向くと、相変わらずザギイとフォートの壮絶な闘いが続いていた。

豹変したザギイと豹変したフォートの戦いは、何の会話も無く続いていた。

常人には、決して見えることの無い速さで闘い続けている。

フォートは息を乱していた。

しかし相手のザギイは、乱れるどころか、逆に落ち着いてきている。

その上、ザギイの顔は笑っていた。

「そう来なくっちゃ、詰まんねえじゃん！」

フォートは、無理して笑つた。

しかしその顔も、時が経つにつれて、次第に引きつり始めた。

どうやら豹変したザギイをここまでとは、思っていなかつたらしい。乱れていた息が、更に乱れていた。

グサ

闘い始めてから三十分。

ようやくこの闘いで傷が出来た。

傷が出来たのはもちろんフォートの方。  
【鬼牙】  
デモーニコ・デンテ

フォートの怯んだ隙をザギイは見逃さなかつた。

この前に出した【鬼牙】とは比べ物にならないほど、大きく、そして威力があつた。

「ぐあああ

」

二人の闘いを見届けたルミナーレは、結界を解いた。

「ライヤナ！お願い……」

そして屋敷の上にいるライヤナに声をかけた。  
ライヤナは頷き、空を見上げ、深呼吸をした。  
そして…歌を歌い始めた。

Perch&#8226;eacute; (ペルケ) lot ロッ

o オゴ go ラ a I オ o イ オル l イ n イン  
 . u ル チェ c ル t チェ r o v a t o r a  
 e エ ラ r a l ロ n タ n o n t a n o  
 r a l e g g e r o .  
 a l d a l  
 i o m ミオ  
 u l u

「うん。凄いでしょ？」

歌師とは、歌を歌つて戦う人のことを指す。

歌に感情を込め、敵を倒す事はもちろん、治癒能力や操り能力、物を燃やすことや凍らすことまで、感情を込めれば何でも出来ると言う能力である。

う能力である。  
歌師は、一億人に一人いるかいないかの確率で生まれる。  
遺伝子は無関係だという。

つまりこの世界に四十六人いるかいないかという、なんとも珍しく、そして恐ろしい能力である。

歌が歌い終わる頃には、ザギイは元に戻り、そして今まで負った傷まで治っていた。

「ライヤナ…お前…」

ザギイは、屋敷の上にいるライヤナを見上げた。カントンテ

「そ。ライヤナは歌術の持ち主。つまり、歌師だったの。」  
ライヤナの代わりに、ルミナーレが答えた。

10

誓めて誓めてとライヤナは、言った。

「さてと…これで終わりだつたらいいけど…終わっちゃいないのよね…。」

ルミナーレが腰を上げた。

「大丈夫なのか？」

「何が？」

心当たりが無いのか、ルミナーレはザギイに聞き返した。  
「さつき、【闇の穴】<sup>テネブローソン・アーカ</sup>使つたる。あれものすげえ体力消耗すつから…。」

「…………」

何も返事をせず、ルミナーレは目をパチクリさせた。

「なつ何だよ…。」

「いや…ザギイはそんなこと言わないと思つてから。フッ…もしかして、全部吹つ切れた？」

ルミナーレが笑つた。

「お前こそ。」

ザギイも笑つた。

（何年ぶりだろう。ザギイの笑顔を見るなんて…。）

久々に心から笑いあつた。

「じゃ、行こうか。ディックのところに。」

「ああ。」

二人の顔付きが変わつた。

「ザギイお兄ちゃん…ルミナーレお姉ちゃん…。」

ライヤナが心配そうに二人を見上げた。

「ダイジョーブ。絶対勝つから。ね？」

ルミナーレはしゃがみ、ライヤナと同じ目線になつた。

「…うん。がんばってね！」

「任せて。」

そう言って、二人は走り出した。

次回はボス戦？です。

## ティーグレ

屋敷の一一番奥の大きな扉。

その奥にティーグレ・ボス、ディックがいた。

「覚悟しろ、ディック！」

「おやおや。もう見つかってしまいましたか。

ディックは、淡々と喋った。

「残るはお前のみ。命乞いでもしたらどう？」

ルミナーレが挑発的に言いつた。

「そうですねえ…今はこちらの不利ですね。では、私はここで退散させて頂きます。」

「そつはさせるか。てめえは今ここで殺す！」

退散発言をしたディックに、ザギイが殺人発言をした。

「では、約束を致しましょう。」

「んだと…？」

「待つてザギイ。」

熱くなっているザギイをルミナーレが止めた。

「私に任せて。」

とザギイに小声でつぶやいた。

「約束つて？」

「ええ。このファミリーには手を出さないことをお約束しますよ。」

「分かったわ。こちらもそちらが危害を加えない限り、手を出せないと約束しますよ。」

ルミナーレが勝手にディックと約束をした。

「おい、大丈夫なのかよ。」

「大丈夫。ティーグレは、約束は絶対守る。手を組むと言つてきたら裏切られる可能性があるけど、約束は平氣よ。」

ルミナーレがザギイに説明した。

「さすが情報屋ですね。それを仕事にしているだけ、ありますね。」

では、これ以上ここには居たくないの。」

「バツと、布を翻し、消えた。

「追うよ。ザギイ。」

「追ひつて… セツキ手は出さねえって約束したばかりじゃねえか。先程と言つていることが違うルミナーレにザギイは疑問を抱いた。「手を出さないとは言つたけど、追わないなんて言つてない。アジトだけでも分かったほうがいいからね。セ、早く行くよ。」

そう言つてルミナーレは、窓から飛び降りた。

続いてザギイも飛び降りた。

ディックは後ろにいるザギイ達を何度も見てきた。まるでザギイ達にペースを合わせるかのように。

しかし、あるとこを境にディックの姿が見えなくなつた。しかもずっと同じとこを回つてているように思える。

「もしかしてこれ… 幻術？」

ルミナーレが急に立ち止まり、あたりをよく見た。

「幻術だと…？ いつの間に掛かつたんだよ。」

ルミナーレの発言にザギイは驚いた。

ずっと同じの煉瓦造りの家。

よく考えれば森に囲まれた、トウロンバファミリーの屋敷の近くにあるはずのない場所であった。

【解】

幻術を解くと、そこは森になつていた。

「やっぱり幻術だったね。さ、先を急げ。」

そう言つてまた二人は走り出した。

森の奥深く。

どれほど走ったか忘れるほど、走つていた。

そこへ、赤い壁のようなものが道をふさいでいた。

「なんだこれ？」

ザギイが首をかしげた。

「これ……死の結界！？何でそんなものが……。」

「死の結界？なんだそれ。」

「うん。死の結界つていうのはね、禁止された結界なの。親しみのある人間を殺すことで、初めて作ることができる結界。それに殺せば殺すほどその結界は大きくなる。もちろん術を発動させるまでもかなり難しいって言われている。結界の中では最上級と言われているけど、それなりのリスクが危険すぎることで禁止されたはずなのに……どこから作り方を……。」

説明しているルミナーレからは、いかにもこれが恐ろしいというのを物語つていた。

「それほど外道つてことか。」

説明を聞いたザギイは、顔つきが更に強張った。

「仕方ない。帰るか。」

「帰る？ここまできてか？」

「仕方ないじゃない。この解き方はまだ分かつてない。それに約束は守るファミリーだから、大丈夫。心配なら、部下寄越せば？」ルミナーレが呆れたように言った。

「分かつたよ。面倒くせえな……。」

ザギイは折れて、ルミナーレに同意した。

そして二人は元来た道を戻つていった。

ティーグレ（後書き）

次回は最終話です。

## 一人

「やあ。『苦労だったね、一人とも。』

そう言って、ハッドは頭を下げた。

「これでティーゲレはもう来ないと思います。念の為、こちらのものを寄越しますので、御安心ください。」

ルミナーレは淡々と話した。

ザギイは隣で、面倒くさそうに突っ立っている。

「ああ。ありがとう。ところで君、ルミナーレ・ビジュと言ったかな。君、カリネじやないかね？」

ハッドは優しい眼差しで、ルミナーレに訪ねた。

「……その通りです、叔父さん。お久しぶりです。」

ルミナーレは一礼した。

「本当に久しぶりだね。十年ぶりかな。大きくなつたものだ。名前、変えてしまつたんだね。でもそれもすてきだよ。また前みたいに遊びに来ておくれ。ライヤナも喜ぶからな。」

ハッドはルミナーレを嬉しそうに見た。

「もちろんザギイお兄ちゃんもね！！」

ライヤナが付け足した。

「それじゃ、今日は失礼させていただきます。もうライヤナを離さないでくださいね。」

そう言って、二人はトウロンバを後にした。

「さてと、帰つたら何作ろうか？おなか減つたもんね。私が作るよ。

「帰り道、ルミナーレがザギイに言った。

「お前、人ん家で食う氣かよ。」

ザギイが呆れていった。

「だから私が作るって言つてるじゃん!」

ルミナーレが膨れた。

その顔を見てザギイが笑つた。

それにつられ、ルミナーレも笑つた。

「ねえ、強くなるのには…過去を捨てちゃいけないんじゃない?過去を受け止めて、乗り越えて強くなるんじゃない?」

ルミナーレが空を見上げながら言つた。

太陽が沈みかけて、とてもきれいな夕焼けになつていた。

「そうだな…。俺も豹変した俺を押さえられるようにしねえとな。ザギイも空を見上げた。

「なあ、ルミナーレ。お前は何のために戦う?」

「決まってるじゃない。自分の為。」

ルミナーレはきつぱりと答えた。

「言つとくけど、自分が死にたくないから戦つてるわけじゃないわよ。」

そしてその後に付け足した。

「じゃ何だよ?死にてえのか?」

「そりや、死にたくないよ。でもね、仲間がいなくなつて、自分が寂しい思いをするのはごめんだから。」

ルミナーレがザギイに笑いかけた。

「結局、自己中心的じゃねえか。」

「その通り。」

そして笑いあつた。

「あ、そうだ!私、殺し屋と情報屋、辞めることにしたから。」

突然、ルミナーレが手を叩き、言つた。

「は?じゃあ、お前仕事は?」

金好きのルミナーレが仕事から手を引くなんて、あり得ないとthoughtザギイは、訊いてみた。

「仕事?仕事はね、ザギイの相棒として働く」とした!そのまゝが、楽しいもん!!」

「はあ！？ 勝手に決めてんじゃねえ！！」

ザギイが怒鳴った。

「一人より一人、二人より三人つてね！ 一人のほうが早く終わるし、樂でしょ？」

「そりや、樂だけどよ…。一人のほうが氣楽だ。」  
ザギイが冷たく言い返した。

「まあいいや。勝手にあの家に住み着いてやる。」  
ルミナー・レが密かに笑った。

「てめえ！」

「まあ、そう言つ」とでよろしくね！ ザギイ…」

ルミナー・レはそう言つて走り出した。

「誰がてめえとなんか組むか！！」

ザギイはルミナー・レを追いかけた。

のちに、この二人が名をあげ、その名を世界中に轟かせた。  
そのコンビに肩を並べるものが出でる」とは、なかつたとか……  
…。

## 一人（後書き）

最後に後書きにお付き合いください。

後書き

皆さま、この度は私のこんな下手な小説を読んで頂き、誠にありがとうございます。

えつと、この話はもちろんパラレルでござります。

と言つわけで、パラレルの世界を覗いてみましょうーー！

（説明）

まず初めに国などのことについて紹介します。  
地形的には一応同じと言つ事にしてあります。

で、ここで地名などなどの発表ーー（何この人……）

この話の舞台である、『イタリーノ』。

これは何処だかお分かりですよね？

もちろんイタリアですーー！

……後は、面倒なんで表でどうぞ。（オイーーーーー）

パラレル 国名など

ドイツエラ ドイツ

ジャンネパ 日本

オーストリア オーストリア

メリカ アメリカ

アドヴァ海 アドリア海

つて、感じです。

では次に技名なので使われた。

イタリア語についてですーー！

こちらも表でどうぞーー！（オイーーーーー）

イタリア語 日本語 イタリア語 日本語

グローボ 地球 フェンデレ 切り裂く

ルミナーレ 輝く

ビジュ	宝石
テネブラ	闇
トウロンバ	竜巻
ヴォント	風
ブスカ	捜す
カヴォルカーレ	乗る
カンディデッツィア	純白
カンジヤルスイ	変化
ティーグレ	虎
ムリネツロ	旋風
フォート	写真
スイツジラトウーラ	封印
ギアッヂオ	氷
タツリオ	刃
ドウラーゴ	龍
シェレトウロ	骸骨
コントウラーレ	逆襲
フィアンマ	炎
イングイネ	鼠
ナイヤ	毒蛇
ランコーレ	怨念
アルマ	剣
ラヴオラーレ	操る
アルベロ	木
アツヴォルジエルスイ	巻き付く
デモニーコ	鬼
デンテ	牙
ラメッタ	小さな刃
コンバツテンテ	戦闘
ダート	情報

インダガトーレ 研究

リサナトーレ 医療

バラディーノ 守護者

アツクア 水

トウオーノ 雷

テツラ 土

カポリスタ 第一

ファットーレ 幹部

セコンド 第二

テルツオ 第三

コロンネツ 口 隊長

クチナトーレ 料理

クオティディアーノ 生活

カポクラッセ 班長

ルーチエ 光

バルツア 壁

スペツキエーラ 鏡

トルナード 竜巻

テネブローゾ 閻

ブーカ 穴

ズラツチャーレ 解く

カダーヴェレ 死体

と、こんな感じです。

ではお次に、作品中でライヤナが歌つた、曲の訳を書きます！

日本語ではこう歌つておりました！

～どうして戦うの？

どうして殺し合うの？

人の命それは皆、平等なのに…。

暗いくらい闇の中。

私は光を見つけた。

その光は、私のところからは遠かつたんだ。

消えてしまつくらい小さくて、

でも決して消えない光を

人は求め、そのために、戦い続けてしまつ。

どうして戦うの？

どうして殺し合つの？

人の命それは皆、尊いのに…。

上も下もない、

人も動物も植物も、

生きているもの、そうでないもの。

全てが全て。

皆大切なに…。」

という感じです。翻訳は、パソコンでやつたのですが、読み方とか、合つてゐるかどうか分かりません。  
まあ…許してやってください。

（感想）

本当にありがとうございました。

感激ですねえ。

実はこの題名何回か変えました。

初めは『歩いてきた路』でした。

でもだんだん書いていくうちに、話の内容つて、結構変わつていく  
もんなんですねえ。

私は毎回なのですが…（笑）

そう言えれば、これ、現実にしようと思つてたんですけど、結局パラ  
レルになりましたね。

やばいよ…計画はお早めに…。（笑）

えーでは、裏？話いきたいと思ひます。

今回のキャラは、ほんどのいろんな漫画からとつてきましたね。

あとは、キャラ混ぜてみたりとか。

でも途中で口調変わつてたり……やばいよ…。

ガンバ、俺！

そうそう、裏といえば、ザギイが過去に豹変した時（一回目）、実はそこにルミナーレも居たという設定にしていたのですが、時間がなくて書けませんでした。（書きませんでした。）

それと、ライヤナが歌師カンタントという設定もありませんでした。

だから豹変したザギイはルミナーレを傷つけて、でザギイが苦しみだし、ルミナーレのある一言で元に戻る的な感じだったんですけど、あるゲームをきっかけに、こうなりました。

それにつじないと、ライヤナの追われる意味がないので。

とこうわけで、この度は私の小説を読んでいただき、真にありがとうございました。（何度もだよ）

突っ込みどころ満載ですが、頑張つて書いたつもりです。  
許してやってください。

続編も書きたいなあなんて、思つてあります。

また、違う小説でも皆様にお会いできたら光榮です。  
それでわ。

Dear You From Yourashisuiryu

## 後書き（後書き）

「お仕事でござり、誠にありがとうございました。  
お仕事でもお書き合いでいただけると幸いです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7206c/>

---

マフィア～強さと足跡～

2010年11月10日10時51分発行